

---

# 俺と彼女の10ヶ月

小丹小菜栖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と彼女の10ヶ月

### 【Nコード】

N0493H

### 【作者名】

小丹小菜栖

### 【あらすじ】

校内一のイケメン・大岡城くん。本当は彼女もほしいし、デートもしたい。なのに城くんには彼女がいなかった。そんな中、やって来た転校生がその日の内に彼の彼女になった。彼女の名前は崎田聖モデル並みの少女だった。

## 第一話 いきなり彼女ができました（前書き）

本編はR指定なしの青春ものですが、BL・女装が含まれます。嫌悪感のある方はお気をつけください。

## 第一話 いきなり彼女ができました

この日、僕は神様に感謝した。  
いや、感謝したはずだった…

6月、龍星高校三年B組は、少しざわついていた。

「こらー、静かにしろ！」 担任・サエドンが手を叩きながら、続けた。

「お父様の帰国に伴い、香港より転校してきた崎田 聖さんだ」

「わからないことも多いと思うから、みんな、いろいろ教えてやってくれ！」

サエドンの横には、黒髪セミロング・170cm位のかわいいモデル並みの女子が立っていた。

サエドンの後に続き、彼女が自己紹介を始めた。

「崎田 聖と申します。小さい頃より香港で生活していたので日本のことは

あまりよく分かりません。いろいろ教えていただけると嬉しいです」

彼女・聖は、静かに丁寧に話した。

男子の目はすでに聖に釘付けだ。

そんな中、サエドンが俺に向かって言った。

「城！おまえの隣だ。世話係、頼んだぞ！」

えっ、えー、俺？

聖は俺の隣の席についた。

「よろしくお願ひします」 そう言つと、聖はニコツと笑つた。

「…ああ、どうも…」 俺はドキドキして小声だ。

そして、男子たちのうらやましそうな視線をもちに浴びた。

女子も聖を見ている。

だが、彼女たちの視線の意味は、男子の視線のそれとは違つた。  
俺の横に座つた聖に対しての嫉妬の眼差しだ。

なぜなら、自分でいうのもおこがましいが、俺・大岡城は校内一の  
いい男だからだ。

ファンクラブもある。

おふくろは元モデルで、親父もそこそこのいい顔をしている。

俺は二人のDNAをばつちりと受け継いだ。

俺の人気はルックスだけのものではない、無口で女に媚びないクールな男。

学内はもちろん、他校からの女子、街を歩けば逆ナンにも合う。

そんな俺は、残念ながら特定の彼女はいない。

彼女もほしい！デートもしたい！あんな事もこんな事もしたい！  
が、しかし…女子との絡みは無しだ。

ただ単に、照れ屋なだけなんだああ。

女子とお話をするなんて…恥ずかしすぎる！これが本音だ。

そんな俺の隣に転校生が、それも、すんげーかわいい女子が座つた。  
俺は、緊張のあまり少し、クラクラしていた。

ホームルームが終わり、サエドンが教室から出て行くと、男子が聖の回りに

集まりだした。

「モデルとかしてるの？」

「彼氏いるの？」

「クラブとか入るの？」

「香港で生まれたの？」

質問ぜめだ。

そして、聖はみんなの質問に一つ一つ丁寧に答えていった。

その口調は静かで女らしく、それがまた男子の心をくすぐる。

俺もくすぐられた。

それにしても！みんな！なんでそんなに気楽に女子とお話できるんだ！

うらやましますぎるぜ。

特に健児、おまえは男子女子構わず馴れ馴れしい上に、おもしろい。

おちゃらけた性格だ。

違う意味、女子にも人気がある…

今度生まれ変わったら俺は、絶対おまえになりたい。

いや、なる！！

授業の合い間の10分ごとの休憩に男子が聖の所に来る。

また質問を浴びせる。それを繰り返して、午前中の授業は終わった。

昼メシの時間になり、聖が俺に聞いてきた。

「城くん、食堂ってあるの？」

どうやらお弁当をもってきていないらしい。

俺も持って来ていないので一緒に食堂に行こうと誘った。

席を立った時、

「崎田さん、学食行くなり案内してあげるよ」  
そう言ってきたのは、いつも真面目くさった学級委員の石田と数人の男子。

「うん。城くんに連れて行ってもらうから、大丈夫。みんなありがと」

聖はそう言つとニコツと笑いかけた。

「いや、僕は学級委員だし、転校生の面倒は僕が…」  
なぜか眉間にしわを寄せ、奥目づかいで話している。  
いつものキャラとはちがうぞ！学級委員の石田くん！

「先生に面倒見ろって言われたの俺だから」  
俺は石田に向かつてぶっきらぼうに言った。

「うん、だから大丈夫よ。委員長さん」 聖は笑顔で俺に続い言った。

「ぼ、ぼ、ぼ、僕は、い、い、石田と申します！委員長じゃなくて、い、石田でい、い、いいですう」

どもりすぎだ…石田。聖の笑顔にやられたらしい。

「ずるいぞー、城！」

健児と他男子たちの視線と声を背に、俺と聖は教室を出た。

学食に向かう廊下で聖が俺に言った。

「城くんって人気者なの？女の子たちがみんな見てるよ？」

「えっ？」

床を見ながら歩いていたので気がつかなかったが、男子も女子も俺たちを

見ていた。

「ああ、やっただあ。城くどうして女と二人で歩いているのよお」  
飛んでやってきたのはA組の靖子とそのお仲間。  
靖子は俺のファンクラブの会長だ。  
うざい、こつというのは彼女にしたくない。

「あなた？転校生って！なんで城と一緒にいるのよお」  
靖子は聖に言ったが、俺が代わりに返事をした。

「うっせーな、先生に頼まれたんだよ」

「え、やだあ、どうして城なのよ！」

俺は靖子の声を無視して、とつとつその場を離れた。

食堂に入るなり、今度はD組の木本が現れた。

「よっ！城、なになに！こんなかわいい子うちの学校にいたっけ？」

「転校してきた、崎田です。よろしくお願いします」 聖が微笑んだ。

「あ、あ、ど、ど、どうも。木本ですう」

どうやら木本もやられたらしい。

頭をかきながら真っ赤になっている。

「食券あそこで買って、中にいるおばさんに渡せばいいから、

サンドイッチとかは、あっちの売店」

俺は事務的に言った。

「うん、わかった。城くんは何を食べるの？」 聖に聞かれ、

「俺？俺、A定……」

今日のA定は、ミックスフライ定食だ。

白身のフライにカニクリームコロッケ、そして俺の大好きなエビフライ入りだ！

結構このエビフライがデカイ！



「じゃ、私も城くんと同じのにする」

聖はそう言っていると、小さなクマ柄の手提げ袋から、これまたかわいいらしいお財布を出した。

か、かわえくなあ。女の子らしいよなあ。

おばさんからA定を受け取り、空いている席に座ったが、なぜだか聖は俺の隣に腰を下ろした。

「と、隣に座るの？向い方じゃなくて？」 俺はあせって聞いた。

「うん？いけないの？」 首をかしげて言われた。かわいい…

聖は続けて言った。

「あのね、香港って恋人同士とか、よくね、並んで座るの」

こ、恋人同士いー？俺は少しうれしさまじりの眩暈を感じた。

この時、俺の頭からは湯気が出ていたに違いない。

聖は俺のあせりも知らず、隣に座りA定を食べ始めた。

そして、こともあるうか俺の大切なエビフライを俺の皿から取り言った。

「私、エビフライ大好き！頂だい！城、これあげる」

「ええー！」

聖は自分の皿のキャベツの千切りを、全部俺のキャベツの千切りの上にのせた。

俺はてんこ盛りのキャベツを見ながら言った。

「キャベツ…食べた方がいいよ…消化の手助けもしてくれるし、健康にも…」

「城って、男なのじゃん」と体のこと考えてるんだね、すごいね」  
聖は首を傾げて言った。

うっ、かわいい…ってか、俺のこと「城」って呼んでるう。

しょうがない、今日は俺たちの出会いの記念に大好きなエビフライ  
は聖に

あげることにしよう。

「おうおうおう…なんだなんだ、最近の若いヤツは早えーなあ。ぐ  
わっははは」

サエドンが俺たちの向かい側にA定をバン！と置き座った。

サエドンの響き渡るデカイ声で俺たちは回りの注目を浴びた。

サエドンは先生なのに結構オープンだ。

というか、校風というのだろうか、この学校の先生たちは結構自由  
に生徒を

いじくってくれる。

「先生、声大きいよ…はあ…」俺が溜息まじりに言うと

「んだっ！いーじゃねーか。城！おまえイケメンのくせして彼女と  
か女っ気ない

んだから、このまま付き合っちゃえ。よし！決まりだ、がははは  
くなっ！崎田」

俺は聖も困っているだろうと彼女を見た。

「はい！そうしま〜す！」聖は素直に答えた。

ええー…。うそ…。だろ…。

俺は聖の返事にあせりまくり、キャベツだけを口に運んでいた。

「なんだ！城、おまえそんなにキャベツが好きなのか？ホラ、じゃ  
やるよ、これ。

「しょーがねーなあ、つたく！」

サエドンは自分のキャベツの千切りを全部俺の皿の上のキャベツにのせた。

龍星高校のイモムシとは俺のことだ…

そして、俺が二番目に好きなカニクリームコロッケを「代わりにこれ、くれ」

と、勝手に取っていった。

昼メシを食べて、校内を少し案内し、5時限目の授業が始まる5分前に教室に戻り、

中に入るとクラス全員の視線が俺らに向けられた。

健児が飛んできた。

「城、おまえら付き合う事になったって本当か?!」

「はい、そういうことになりました」

聖が(それがなにか?)みたいな顔で言った。

「きゃー、いや〜城くん〜」とか

「マジかよ！」とか

「がっくりだよ…」などと、みんなは騒ぎ出した。

学食で大きな声のサエドンとの会話を聞いていた生徒が、みんなに広めたようだ。

石田に限っては、いきなり俺にスリーパーホールドかけてきた。

石田がプロレス好きだということを初めて知った。

今日は新しい石田の発見が多い日だ。

こうして、俺と聖は、彼女の転校一日目から学校公認のカップルになった。

…あつ、美男美女の…



## 第二話 聖の淋しさ

考えてみれば、サエドンに言われたからと言って俺は一度も「付き合う」と

彼女には言っていない。

が、俺も彼女がほしかったし、聖はかわいいし、女子と話すのが恥ずかしい俺

としては、トントン拍子に事が運んでサエドンに感謝だ。

帰宅部の俺は健児たちと帰ることが多い。

この日、健児が聖と一緒に帰ろうと誘った。

聞くと、聖の自宅と俺の家は同じ方向ということがわかった。

健児たちと途中で別れて、俺は聖と二人になった。

「聖の家ってどこ？」

「えーっと、住所は横縦町のプレディンシャル・横縦マンション。

知ってる？」

ええー！

「俺の家と同じだよ、横縦マンション」俺が言うと

「えー、そうなの？すごい奇遇だね！うれしいなあ。テヘッ」と、聖は笑った。

や、やっぱ、かわいい…

この思いがけない展開に俺はまたまたサエドンに感謝をし、聖との運命を感じ、

心の中はハッピーでいっぱいになった。

「あつ、ちょっと待ってて。私、お弁当買ってくる」  
聖が数件先に見えた弁当屋に走って行った。

「ごめんね、おまたせしちゃって。これ、夕ご飯なの」  
聖が弁当の袋を少し上に上げて見せた。

「家、今日は一人なの？」 俺が聞くと

「うん！いつも一人だよ。お母さんいないし」

そうか、お母さん亡くなっているんだ。まずいこと聞いちゃったなあ。

お父さんの帰国で聖も一緒に帰ってきたんだよな。

「あつ、お父さんは？仕事で遅いの？」

「ううん。父は香港にいるの」 聖が言った。

「えっ？お父さんの帰国で帰ってきたんじゃないの？」 俺は聞きなおした。

「本当は私、一人暮らしなんだ。先週末までは父も一緒に日本に戻ってきてたん

だけど、もう香港に帰った、女のところ…」

聖は寂しそうに微笑んだ…ように見えた…俺には…

なんか複雑なんだなあ、聖の家族。

「一人暮らしなんて、寂しいだろ？」 俺は自分の足元を見ながら聞いた。

「ん？日本に来てまだ一週間しか経ってないけど、もう慣れちゃったあ」

聖は明るく言おうとしていた…ように見えた…俺には…

マンションに着き、明日の朝マンションロビーで待ち合わせの約束をして

聖は10階へ、俺は15階へそれぞれの自宅に帰った。

俺は夕食の時、おやじとおぶくろに聖のことを話した。

転校生の女の子が同じマンションに一人で住んでいるということだけ  
を言い、

付き合うことになった、ということはまだ内緒にした。

「じゃあ、じゃあ！お夕食はできるだけ誘ってあげなさい！」

と、おふくろがうれしそうに言い、おやじはおやじで、

「かわいい子なら、いつでもウエルカムだぞ！」と二人で盛り上  
がっていた。

聖の母親は亡くなっていて、父親は別の女と暮らしている。

「もう慣れた」と言っていた聖だが、広い家の中で一人で食事をして  
いると

思うと俺はなんだか悲しくなってきた。

その夜、俺は聖のことをずっと考えて眠りについた。

### 第三話 早く会いたい

次の日からほぼ毎日、俺と聖は登下校を一緒にした。

聖は、かわいい顔をしているのに気取らず、性格がさばさばしていると女子にも

人気が出てきて、たまに女子と寄り道をして帰ってくることもあった。

おふくろとおやじは、娘が出来たと大喜びで、聖の予定のない日の食事は、

いつでも来るように、と勧めたが、毎日じゃ悪いからと聖が遠慮し、週4日ほど来るようになった。

学校が休みの時は、おやじの車で東京見物を四人で出かけたりしていた。

香港生まれの聖は、日本がすごく楽しいらしく、いつも遊びに行く時は

うれしそうにしている。

俺は、そんな聖の姿を見て内心ではデレデレだ。

夏休みに入る少し前、聖がすり傷を作って帰ってきたことがあったが、

大したことはなく、そのまま夏休みになり聖は父親のいる香港に帰って行った。

聖が香港にいる間、俺は健児やクラスの男子たちと遊んだり、大学受験のために勉強をしていた。

たまに聖から香港の楽しそうなメールと写真が送られてきて、俺は少し寂しかった。



やはり、あっちの方がいいのかなあ。

8月も終わりを迎え、日本に戻ってきた聖を空港までおやじと迎えに行った。

到着ロビーから出てきた聖は、ピンクのワンピースが良く似合っていて

変わらない笑顔で俺に手を振った。

「疲れてない？」 俺が聞くと、

「ううん、ぜんぜん。だって4、5時間ももん。でも、早く会いたかったな、城に！」

うっ！かわいいことを言ってくれるぜい。

クーラーの効いているロビーだが、俺はテレテレの汗をかいた。

マンションに着くと聖は

「後でお土産を持っていくね」と言い、部屋に一人で戻って行った。

俺はまだ聖の家に行った事がない。

やはり、女の子一人が住んでいる家に、彼氏だからと言ってお邪魔するわけにも

いかない。

しかし…覗いてみたい。

きつと、かわいらしいキャラクターで埋めつくされているんだろうなあ。

ベッドはピンクのカバーだったりしてえ〜…へへへ〜

俺の妄想は爆裂&炸裂していた。

夕食の時間に合わせ聖が家に来て、おやじとおぶくろには、有名ブ

ランドの

色違いのキーケースを。

俺には、中に手を入れて左右のボタンを押すとパンチをするモペックタイプの

パンチ人形をくれた。

おやじたちと俺の土産の差はなんなんだろう…

聖は自分の分の人形も持つてきていて、

「ホラッ、こっやって戦えるんだよ。楽しいでしょ？」と、俺の人形に向かって自分の人形でパンチを始めた。

……た、たのしいです。

## 第四話 聖の擦り傷？

新学期が始まると、10月末の行事、文化祭の準備が始まった。

「おまえはウェイターをやってくれ！」 健児が俺のところに来て言った。

「客寄せのためだ！おまえがいれば満員御礼なのだー！」  
拳を上には振り上げる健児は、一人盛り上がっていた。

俺は健児がしきる模擬店「だんごの楽園」という女子をターゲットにした団子屋を手伝う事になった。

クラスのイケメン上位5人が、なぜか黒服を着て接客をすることになった。

聖はアニメ・漫画部の後輩たちにたのまれコスプレをして客寄せをするらしい。

それと同時に、龍星高校の文化祭イベントの目玉である「ミス龍星コンテスト」に推薦された。

出場する女子は、校内で一次審査の投票を行い、選ばれた15名は文化祭三日目の午後に行われる決勝に出場する。  
たぶん聖の優勝は間違いなしだ。

数日後、窓の外をボーッと眺めている俺の前に、石田と文化祭実行委員のメンバーが現れた。

「たのみがある！」　いつになく目の奥に炎が燃えている石田に少しビビった。

「な、なんだよ。」

「頼む！」

「お願いします！」

石田と実行委員の数人が俺の前で手を合わせ拝んでいる。

「だから、なんだよ……」

男子数人に囲まれて拜まれて、小心者の俺は汗をかいていた。

「ミスコンの優勝賞品になってくれ！」

石田の言葉が理解できない。

「ああ?! 賞品……?」

「そうだ! 賞品だ! 優勝した女子に軽くでいいからキスをしてくれ。ポツペでいい!」

なぜか石田は両手拳を天に向けて叫んだ。

「大岡先輩校内一のイケメンだから、先輩がキスをする! なんて大盛り上がり

間違いなし! なんですよ!! お願いします!」

石田に続いて2年の実行委員が言った。

「お願いします!!」　みんなに声を揃え頭を下げられた。

俺は少し考えた。

優勝は… 聖に決まっているようなものだ。

えっと、っーことは、聖とキス… ホツペと言えども、キ… スウウ。

俺はドギマギと汗をかいた。

聖と出会ってから、いろいろな汗をかいている俺だが、キスの妄想の汗は

いろいろな毛穴から出た。

「い、石田の頼みじゃ断れないよ、クラスメイトだし、学級委員だし」

俺は冷静を装った。

「いいのか！大岡！！」

「ありがとうございます！大岡先輩！」

俺は内心うれしさいっぱい、花いっぱいであったが、

「ああ、キスだけだろ」

などと、女子とはホッペにでもキスをしたことがない俺ではあるが、女慣れしている素振りでOK を出した。

そして数日後、張り出されたミスコン募集のポスターには、優勝者賞品として

「食堂食券2000円分並びに3年B組大岡城のキス」と書かれていた。

募集には、俺のキス目当てで過去最高の100人弱の女子の応募があり、

実行委員会は大喜びだった。

優勝は聖に決まっているので、俺の気持ちは余裕だ。

文化祭準備が忙しくなると、俺と聖は別々に帰ることが多くなり、その日も学校からの帰宅時間が遅く、すでに暗くなっていた。

俺が、マンションに続く坂道を登り歩いていた時、少し先の角から聖が出てき

俺には気づかず、聖は前を歩いていた。

聖をびっくりさせようと、静かに大股で歩き近づいた。

「わっ!！」

「うわっ!！」

聖のキヤツ!というのを期待したが、思いのほか大きな声で驚いていた。

振り向いた聖は

「キヤー、いやだあ、城。びっくりしちゃったあ」と、いつもの聖だ。

しかし、聖の髪は少し乱れていて、腕からも血が出ていた。

「どうしたの?!血が出る!」俺は驚いて聖の腕を掴んだ。

「…さつき、そこで…転んじやったの」聖は下を向きながら言った。

「早く帰って手当てしよう、痛くない?」

「うん。大丈夫…軽くすつちゃっただけだから、心配しないで」

俺は聖の手を取って家まで急いだ。

聖の手は小さくはないが、細くて指が長いと、握っていてわかる。

初めて…手をつないだぞー!。少し有頂天な俺がいた。

聖の家には救急箱がないというので、俺の家に行き、おふくろに手当てをしてもらった。

「よかったわあ、聖ちゃんの顔に傷がついてなくて。かわいいお顔なんだから

これからは気をつけるのよ」おふくろの声に

「は、い、気をつけます!お母さん!」と、聖が言った。

おふくろのことをお母さん…と呼んでいる姿は嫁姑のようだ…

俺は未来予想図などを想像して一人口元の口角を上げ、ニヤけてしまった。

「城、もお何？ニヤニヤして気持ち悪い子ねえ」  
おふくろに言われ、口元を引き締めてみたが引き締まらず、妄想は  
ふくらみ、  
すでに俺の頭の中には、聖の間に子供が二人出来ていた。

聖の怪我から一週間経ち、朝いつものように、マンションロビーで  
聖を待っていた。  
エレベーターから出てきた聖は、膝に大きな絆創膏を貼り、手の甲  
にも絆創膏が  
貼られていた。

「どうしたの？！それ！」 俺はまたまた驚いた。

「んー、あのね…えーと、昨日！昨日ね、学校の帰り道に横縦公園  
で…」

あそこで小さい子がジャングルジムから落ちそうになって、受け  
とめたときに

すっちゃったあ」

聖は、エヘッと舌を出して笑った。

「痛くない？大丈夫？気をつけるよな。最近一緒に帰れないんだか  
ら」

俺は彼氏ぶった。

「うん！文化祭終わったらまた一緒に帰れるよね？」  
そう言うと聖は手を繋いできた。

「あたりまえだろ！あんまり心配させんなよな」

俺は聖の手を引っ張って歩き始めた。

そしてその日から一緒に歩く時は手をつなぐようになった。

う...う...う...



## 第五話 聖…そうだったのか…

文化祭10日前になり、ミスコン15人選ばれ名前が、張り出された。

もちろん聖は入っていた。

それから2日後、朝、聖を待っていたが中々マンションロビーに下りて来なかった。

携帯に電話してみたが出ない。

5分過ぎても来ないので、聖の部屋まで行ってチャイムを鳴らしたが、無反応で心配になった俺は、自宅に戻りおふくろに事情を説明して

万が一のためにおふくろが預かっていた聖の家のスペアキーを受け取った。

おふくろは町内会の朝掃除のため出かけるので、俺一人で聖の家に行った。

もう一度チャイムを鳴らしてみたが、同じく無反応だった。

「あー、初めて彼女のお宅にお邪魔するのに無断侵入かよ…」  
俺はドアに鍵を差込み、ゆっくりとまわした。

ドアもゆっくり開けて、まずは顔だけを玄関に突っ込み覗いて聖の名前を呼んだ。

「ひ、聖…？いる…？」

シーンとしている。

そして玄関に入り、ドアを閉めた。

部屋の作りは俺のところとほぼ一緒だったため、俺はリビングに向いドアを開けた。

誰もいなかった…

「いないのかな…どこ行っただらう…」

俺は一步りビングに足を入れた。

何かを蹴ってしまった。

………えっ？何？…これ。

足元に転がっている黒い棒を拾った。

…黒い棒が二本、チェーンで繋がっていた。

「こ、こ、これは、又、又ンチャクウウ？！」

又ンチャクだった。

横にはボクシンググローブが右、左と離れて落ちている。

そして、ふと前方斜め右奥を見たら、

「サ、サ、サンドバツクウウウ？」

もつと奥には

「えっ？！なんだ！あれは…木？木？」

それは、木の丸太に横からいくつかの棒が突き出ているものだった。昔、香港のカンフー映画でみたことのあるカンフーの練習用に使う等身大の木の人形だ。

それと同じものが置かれていた。

なぜ、こんなものが…！

俺の体からたらりたらりと汗が出てきた。

いつもとは違うしあわせの汗ではない…

「聖の部屋は、乙女チックで…ぬいぐるみがたくさんあって…ピ、ピンク色で」

それは俺の想像だ、いいんだ！たとえば、聖がカンフーとか格闘技が

好きでもいいんだ!!

かわいい聖には変わらないのだから!

俺は自分に一生懸命言い聞かせた。

とりあえず、見なかった事にし自分を落ちつかせたあと、寝室と思われぬドアを開けた。

ベッドが置いてあり、誰かが寝ていた。

聖だ…

「聖?」俺はすぐさまベッドに近づき聖を見た。

「どうした?具合悪いのか?」

「うゝゝん」聖は赤い顔をしてうなされていた。

おでこに手を当てたら、すごく熱かった。

「うゝゝん」

聖は体が熱いのか掛けていた布団から腕を出した。

「うわっ!うわっ!うわー」腕と肩が出た。

は、は、裸だああ。

俺はうろたえ、一步後ろに後ずさり右・左と一人で、あせりのステップを踏んでいた。

やばい、やばいー、どうしようー!

「うゝん、熱い…あつ…い…」

聖はそう言つと、今度はおもいきり布団をめくつた。

全身が顔になった。

ぜ、ぜん、全身、は、裸 !

俺は全裸の聖を見てしまった。

天と地がひっくり返るといふことはこういふことだったのかー!

が、我に返り、聖が冷えてはいけないと思い、震える手で布団を掛けなおしてあげた。

顔を確認した。聖だ。確かに聖だった。

少し布団を上げて聖の胸を見た。

「ない…ない、女子にあるはずの胸のふくらみ二つというものが、な…い」

「…コイツはペチャパイなんだ、そうだ、相当なペチャパイだ。

次に足元から布団をめくつてみた、そして閉じてみた。

もう一度確認のため、足元の布団をめくつた…

「あ…あるうう。か、下半身についてい…る。それも、俺より多少大きいものが

…ついて…いるううううー」

俺は大の字の形のまま、どこかの暗闇に吸い込まれていった。

「うわあああ」

勢いよく後ずさり、壁にへばりついた。

聖が…男になっている。

いつの間に変身したんだ！！

熱が出ると男に変身するとか？！

などとわけの分からない俺の考えがうずめくこと数分。

「う…ん、ん、熱いよあ…」

聖が赤い顔のまま、うなつた。

どうしたらいいんだ！俺は！

おふくろを呼ぶわけにもいかない。

とりあえず、薬だ！体温計だ！水枕だ！

俺は自分の家に戻り、全てをそろえて聖の部屋に戻ってきた。

「落ち着け！自分！」 と深く深呼吸をして、聖の熱を測り、水枕を作り、

汗をかいている聖の体をタオルで拭いた。

制服を着ているきゃしゃな聖からは想像できないくらい、細いが筋肉質な体だった。

「いつもの…聖じゃない、グスン…」

俺は半泣きしながらも、

「あつ、薬飲ませなきゃ」

「水水」

「コップコップ」

などとウロウロした。

人間ビツクリした時やパニックした時、声を出してブツブツと一人ごとを言ってしまうことを、この時知った。

「うおっ！な、なんだ、俺の携帯か…びっくりしたあ」

俺がせつせと聖のお世話をしていると突然、俺の携帯が鳴った。

「うおっ！な、なんだ、俺の携帯か…びっくりしたあ」

「城？聖ちゃん、いたのー？」

町内会から戻ってきた、おふくろが心配してかけてきたものだった。俺はなんと言っているのか分からず、

「えーとえーと、なんか風邪みたいで…」

「ええ？！風邪？ママすぐ行くから」

「ヤバイよ！こんなの、おふくろが見たらひっくり返っちゃっよ！」

「聖が男だったなんて…」

「いい！いい！来なくて大丈夫だから！！」

俺は必死だった。

「どうして?!とにかくママ今から行くから、あなたは学校に行きなさい。」

遅刻の理由はママが連絡しておくから」

「いや…あの…」

俺がうるたえている間に、おふくろの電話は切れた。

切れた携帯を眺めつつ、俺はどうしていいのか分からず溜息をついてベッド脇にたたずんでいた。

バタバタとおふくろの足音が聞こえてきた。

もう…おしまいだアーーー。

俺は天を仰ぎ目を閉じた。

ベッドルームにおふくろが入って来た。

「城、あんた、まだいたの?早く学校に行きなさい。聖ちゃんは心配いらぬから、

ママにまかせなさい」

おふくろは、そう言いながら聖に近づいた。

「いや…実はね、おふくろ…」

俺の声を無視して、おふくろは聖のおでこに手を当てている。

「熱は?あらまあ、赤い顔しちゃってかわいそうに」

「あの…おふくろ?あのね」俺の声はまた無視された。

「あらまつ!パジャマ着てないじゃないの。どこにあるのかしら、パジャマ」

おふくろは布団から出ている聖の肩を見て言い、別の部屋にパジャマを探しに行った。

その間も俺はベッド脇にたたずんだままだった。どこからかパジャマを見つけて来たおふくろが布団をはがそうとした。

「うわー！だめだよ！布団めくっちゃダメだあー」  
俺は必死に布団を押さえつけた。

「なに！病人の頭の上で大声出してるのよ、あんたは！どきなさい！」  
おふくろは俺を横に押しやり布団をめくった。

…もう、おしまいだ…おふくろ、気絶するかも…

「聖ちゃん、もう大丈夫だからね。お母さんが来ましたからね〜パジャマ着て

暖かくして寝ましようね〜、後でお粥作ってあげますからね〜」  
何事もないかのように、おふくろは全裸で寝ている男の聖に話しかけ、  
パジャマを着せはじめた。

「え…え…ええー！」

俺は、またわけが分からなくなった。

よく、わかりません…この状況がよく、わからな〜い！！

「城！いつまでボー〜とそんなところにいるの！早く学校に行きなさい！」

おふくろの声で現実に戻され、俺は聞いた。

「おふくろ…聖、おとこ…だよ」

「そんなもん、この姿見ればわかるでしょ！付いてんだから！」

「いや…おふくろ、ビツクリしないの？聖、男だよ…」

「そんなこと、とっくに知ってたわよ」 おふくろは平然と言った。

「そうなんだ。とっくに知ってたんだ…って、ええー…なんて？

今！なんて言いましたああ？！」

俺はもう完璧にわけが分からない。

「パパもママも聖ちゃんから聞いて知ってたわよ。城の帰りが遅いとき、三人での

食事の時、話してくれたのよ。だますのは心苦しいからって！」

「ええー！俺聞いてないよ！全然知らないよ！」

「ママが言わないでいいって言ったの。だってさあ、あなた彼女で来たって

うれしそうだったし、ママもパパも聖ちゃんみたいな、かわいい子が娘だった

らいいなあ…なんて！」

俺はもう開いた口が塞がらなかつたし、全身の力も入らなかつた。

両親にもだまされていた…

俺はヨロヨロと部屋を出て、鞆も持たず学校の方に歩いていった。

そして、通学途中にある横縦公園のブランコに腰をかけ、ジャングルジムを見た。

「聖…ジャングルジムから落ちそうになった子を助けたって言った。た。

お助けウーマンじゃなくて、お助けマンだったのか…」

「でもなんで女装なんてしてんだ？」

「学校にはバレてないのか？」

「どうして男なのに、あんなにかわいいんだらう…」

「聖は男だけど…俺の彼女なんだよな…」



俺はブランコにずっと座り続け、いろいろなことを考えた。

5時を知らせるメロディーが町内に響き渡った。

その音で俺は、今日一日学校も行かず、公園にいたことに気がついた。

家に帰ると、おふくろは聖の部屋に行っているのかいなかった。

俺は自室に行き、考える事が多すぎて一つも答えのでないまま、ベツドの上に

仰向けになって寝転んだ。

トントン…

部屋のドアを叩く音がした。

「城？お夕飯用意してあるから、パパと食べてね。ママ、聖ちゃん  
のところだ

一緒にお粥食べるから」

おふくろの声がドア越しに聞こえた。

時計を見たら7時を回っていた。

おふくろが家に戻ってきて夕食の仕度をしていたことにも気づかなかつたし、

腹が減っている事も気がつかなかった。

ダイニングに行くと、おやじが炊飯器からご飯をよそっていた。

「おう！早く座れ。今日は二人でメシだ」

おやじも知ってたんだよね…

「おやじ…なんで言うてくれなかったんだよ」俺は気の抜けた声で聞いた。

「だって、おまえ、彼女できたって喜んでたろ？」  
それはおふくろからも聞いたよ…

「でも、男だぜ！聖、男だったんだぜ。自分の息子の彼女が男ってわかったら

普通ビックリするって、というか反対するっていうか…」

「ん！まあな！少しびっくりしたよ、パパも。でも、まあ今の世の中、男同士ってのも、

ありじゃないのか？本人同士がいいんなら。まっ、孫の顔を見れないのは寂しいが」

おやじは、さといもの煮っころがしをつまみながら言った。

本人同士って、本人は何にも知らなかったんだよ。

それに、なんで孫の話までなってるんだよ。

確かに、確かに俺の妄想の未来予想図では聖との間に子供が二人いた。

しかし、それは聖が女であることが前提だ。

俺は、おやじとおふくろの頭の中を覗いてみたかった。

親の顔も見てみたかった…じいちゃんとはあちゃんの顔が浮かんできた。

…いやいやそんなことは、どうでもいい。

8時が過ぎたが、おふくろはまだ戻って来なかった。

俺は聖の部屋に行った。

「おふくろ？聖の具合どう？」

俺は恐る恐るベッドルームのドアを開けた。

おふくろはチラリと俺の方を見て言った。

「あら、来たの？やっぱり恋人が病気だと心配なのね」

恋人…って。

俺はもう何も言うことはない…このままこの場に流されよう。

「今さっき、また眠ったところよ。熱も下がってきたし、お粥も食べてくれたし」

明日もう一日お休みさせるから先生に言っておいてね」

「うん…」

聖は静かに眠っていた。

顔だけ見ていると…女子だ。女の子みたいだ。

「ねえ、おふくろ…学校って、知らないんでしょう？聖のこと。よく女として

転校できたよね…」

「知ってるらしわよ。理事長とお父様が知り合いなんですって。あと、校長先生

と担任の佐伯先生も知ってるって言ってたわ」

なにー！ー！サエドン？サエドン！知っていて俺に聖と付き合えって言ったのか！！

## 第六話 サエドンの頼み

翌日、俺は少し早めに学校に着いた。  
サエドンと話をするためだ。

職員室に行くときサエドンは、のん気にアンパンを食べていた。

「佐伯先生、ちょっとお話があるんですけど…」  
俺は低い低い声で言った。

サエドンは、アンパンをコーヒー牛乳で流し込んでから言った。

「おう！おはよう！なんだか、今日の城はいつも以上にクールな目つきと」

お声だなあ。そういうえば、聖、風邪引いたんだって？おまえの母さんから

連絡が来たぞ。おまえも昨日休んだけど、恋人の看病か？んがはははは〜」

「んがははは〜じゃないですよ…先生…。どーいうことですか？聖のこと…」

俺は超低音ボイスで言った。

「…バ、バレた…？すまん！」

サエドンは頭を下げ、

「ここじゃあ、ちょっと話しづらい。指導室に行こう」  
俺とサエドンは指導室に移動した。

「いやー、職員室じゃヤバい話した！理事長と校長と教頭とオレしか知らんから。」

城！本当にすまん！！でもまあ、おまえもまんざらでもないよう

なあ〜」

サエドンは一応謝るが悪びれた様子は見当たらなかった。

「それは、聖が女であった場合のことでしょう？」

俺の声が大きすぎるのかサエドンが俺の口を押さえた。

「デケー声出すな！城、おまえに押し付けたことは悪いと思っ  
てる。」

が、アイツもいろいろ事情があつてなあ」

サエドンはしんみりと言った。

そういえば、母親亡くして、父親は女のところだったなあ。

「聖の家の住所を見たら、城と同じマンションだったんだ。それ  
におまえ、

クールで無口だから、もしばれても口外することは無いと信じて  
いるんだ。」

うんうん！」

サエドンは腕を組み一人うなずいていた。

「で、なんで女子になってるんですか？聖は…」

俺の一番の疑問だ。

「簡単に言つとだなあ…」

サエドンが言うには、香港での聖はものすごく喧嘩早く、小・中は  
義務教育のため

退学にはならなかったのだが、高校生になってから喧嘩が原因で三  
回自主退学

をし、転校を繰り返していたらしい。

で、父親と龍星高校の理事長が知り合いで、引き取る事になったと  
いう。

でも男のままだと同じ事を繰り返すだろうからと、理事長の提案で女子としてこの学校に転校してきた。で、サエドンが担任になって、俺に託した……らしい。

「女子に変身したからって喧嘩しなくなるとは限らないんじゃないですか？」  
俺は言った。

「それはそうなんだが、聖にはよく言い聞かせてある。喧嘩しそうになったら」

下を見る！と」

「下……？」

「スカート穿いていることに気づけと……！」

「……」

俺は、ガツクリとうなだれた。

「そんなことくらいで自覚できると思っんですか？」

「いやいや、現に喧嘩してないじゃないか！この学校に来てから……！」

サエドンはガッツポーズで言ったが、俺は何度か聖が傷をつくって帰ってきたことを思い出した。

「聖……喧嘩してるかもしれない……」俺の言葉にサエドンは立ち上がって言った。

「なっ！なに……！！！」

サエドンの声はデカかった。

俺はサエドンの口を押さえて言った。

「時々、腕とか膝に傷つくってたし、血流して帰ってきてましたよ」「マジ…か？」

校舎にHRの始まりの鐘がなった。

「まあ、いい。聖は今日も休みだろ？明日話を聞いてみるよ。」

あつ、城！引き続きよろしく！頼む！」

サエドンが頭を下げた。

俺は無表情のまま指導室を出た。

教室に向う俺の背中に

「ひみつだぞー！ー！ひ〜み〜つうううう」

とデカイ声で訴えていた。

全然秘密のような声ではない…

俺が教室に入ると健児が近づいて来た。

「城〜、なんだよなんだよ昨日は、聖ちゃんと二人でラブラブ欠席かよ〜」

「そんなんじゃないよ。聖、風邪引いたんだよ」

「えー！じゃあ、おまえが看病してたのか？やっぱラブラブ欠席じゃねーかよ」

健児はうらやましそうに言った。

「はあ…」

「な、なんだよ。溜息ついて潤んだ目でオレを見んじゃねーよ」  
なぜか健児は顔を赤らめあたふたしていた。

俺のこの苦しみをおまえに分けてやりてーよ、健児。

## 第七話 今後の二人

「おまえに託す!!」

サエドンの言葉を思い出した。

託す…託されちゃったの?…俺…

晩ご飯を済ませ、俺は聖の部屋に行った。

だいぶ緊張している。

どんな顔をすればいいのだろうか…

俺が聖の家のチャイムを鳴らした。

インターホーンで俺とわかると勝手に入って来いと言われ、俺はリビングに行った。

聖はパジャマ姿のままソファに座り、テレビを見ていた。

「だ、大丈夫なのか、風邪、も、もう」俺はしどろもどろだった。

「ああ、お母さんのおかげで良くなったよ。おまえに助けられたらしいな、

サンキュウ」

聖が聖でない…喋り方が男だよ…

「なに落ち込んでんだよ。オレが男だったからか?」  
オ、オレとか言ってるしい。

…顔は女だ、うっ…でも男だし。

「悪いな!だまして。でもさあ、お父さんとお母さん、オレが男だって



告白しても喜んでたぜ。いい両親だよなあ」  
聖が言った。

「うん…ちょっとあの夫婦変わってるかも…」  
俺が言うと聖は笑った。

「で、どーする？オレたち、これから」 聖の言葉の意味がわからなかった。

「ど、どーするって？なにが」

「付き合ってた？それとも」

「俺、サエドンに頼まれたから、聖の監視役！だから…」  
俺はなぜだか聖とこのまま終わりたくなかった。

他の誰かが聖の監視役になるのはイヤだと思う自分がある。

どうしてだ…どーしたんだー俺

「うん、じゃ監視役でオレと付き合っていくか？」 聖が俺を見て笑った。

「ああ、ど、どっちみち後半だし…」

「わかった。じゃあ、よろしくね」 城 「いつもの聖のかわいいしぐさで言った。」

と思ったら、

「あっ、そうだ、悪いけど家にいるときはオレ男だから、頼むぜ！」  
こ、今度は男になった…

とりあえず、このギャップに慣れよう。

## 第八話 擦り傷オンパレード

そして次の日からまた、いつものように手をつないで登校した。なぜ手をつなぐのかと言われると、聖がつないで来るからだ。

教室の中で俺は聖から目が離せなくなっていた。

女子とも男子とも楽しく話している聖は女子そのものだった。やっぱり、かわいい…

俺のフィルターは壊れてしまったのだろうか…

聖の正体が何時バレるかという心配と、自分の聖に対する思いで俺は一人苦しんでいた。

文化祭3日前、俺は8時ごろ帰宅した。

「聖ちゃん、今日は夕食要らないって来なかったのよ」  
おふくろの言葉で心配になり、俺は聖の部屋に行った。

玄関の鍵はかかっていたいなかったので勝手に入り、リビングのドアを開けた。

「聖、メシ…：…どうしたんだよ！それ！」

テーブルの上に絆創膏や塗薬が散乱していて、聖は急いでTシャツを着ようと  
していた。

「聖！おまえ…：見せてみる！」

俺は聖が着ようとしていたTシャツを脱がし取った。

「ハハハくはあ…：」 聖は苦笑いをして「テヘツ」と首をかしげて笑った。

…やめてくれ、その顔と体のバランスに俺はまだ慣れていない。

聖の体は、全開バリバリ青たん満開だった。

「おまえ…やったのか…」

「いやー、つい…」

聖の言葉に俺はうなだれた。

「なんかさー、横縦北高の細田？あいつ、すんげー生意気でさあ、中坊相手に

カツアゲなんかしちゃってたわけよ、でさー」

聖は言い訳を始めた。

「でさー、じゃないし…横縦北高の細田って悪い事大好きで有名なんだよ！

危ないだろ！」

「あゝ大丈夫！どーってことなかったよ。お付みたいのが10人位いたけど

順番にやつつけて、最後に細田に一発お見舞いしといたからさ！」

聖は俺の心配をよそに言った。

横縦北高の細田というヤツは、いつも仲間を引き連れて繁華街をうろつき、

カツアゲはもちろん、傷害事件もいくつか起こして少年院に何度か送られ

ている札つきの悪だ。

それを相手に勝利してきたらしい聖は、どんだけ強いのだろう。

「もうすぐ文化祭でミスコンに出るんだろっ？顔は気をつけるよなあ」

俺は傷の手当てをしながら言った。

「わかってるって！優勝賞品は城のキスだもんなあ」

忘れていた…聖の言葉で思い出した。

俺のキスが優勝賞品にも入っていたんだ…

聖が優勝したら、そしたら…俺は聖とキ、キス…。

ヤバイ…俺のファーストキスは、男となのか。

俺がそんなことを考えていたら聖が言った。

「あっ、もしかして、城、女知らないとか？キスもしたことない…とか？」

俺の顔を覗きこんで聞くのはやめてくれ…

「城って、なんかクール気取ってるけど、本当は女とかに絡むの恥ずかしいんじゃないの？」

ず、凶星だ。ビンゴだ。おまえには透視能力があるのか…

「ん、んなことねーよ」俺の否定の言葉には力がまったくくない…

「でも、聖が優勝したら俺とキスだよ、男同士だよ」

俺は聖をチラッと見て言った。

「ああ？オレ？キスぐらい別にいいよ。なんなら今、練習しちゃおう？」

聖はそう言つと、俺のあごを持ち、上に上げた。

聖に見つめられた俺は一瞬記憶が逃避行した。が！

「うわー！。や、やめろ！な、なんで今おまえとキスしなきゃなんねんだよー！」

俺はソファから立ち上がった。

「あんだよ、恋人同士じゃないの？オレたち」 聖は顔色も変えずに言った。

「そ、そついう問題じゃない！と、とりあえず二度と喧嘩すんなよ！」

俺はあせりにあせりまくってテーブルの角とか棚の角とかに足をぶつけつつ、

最後にドアで顔面を強打し、聖の笑い声を背に受け、家に戻った。

## 第九話 暴れん坊登場

文化祭が始まった。

健児しきりの「だんごの楽園」は女性客100%。

俺たちイケメン5人の接客で初日と2日目ともに大盛況で両日共に午後一には、だんごが売り切れでしまい、残りの時間は暇だった。

聖はアニメ・漫画部の呼び込みで初日は、人気アニメのかわいいキヤクターになり、

2日目はメイド姿で男子生徒たちを虜にしていた。

石田はカメラ小僧になり、写真を撮りまくっていた。

また新しい石田のキャラが出てきた。

はあ、みんな本当のこと知ったらどうすんだろ…

男でもいいのだろうか、みんなは。

俺は？俺は…聖が男でも…

やめよう、やめよう、俺は何を考えているんだ！

自分を見失うな！！城！

最近是自己で言い聞かせることで精一杯だ…

文化祭最終日、3日目の午前中、「だんごの楽園」に聖とクラスメイトの

女子数人がやって来た。

「城、来たよ」

聖の声に振り向いた俺は驚いた。

団子食べていた女の子たちは、聖を見てトロンとした目になった。

「な、なんだよ！その格好は！！」

俺は聖の腕をひっぱり隅の方に連れて行った。

「今日はこれなの。ホストのコスプレ、似合う？」

聖は細身の黒のスーツに身を包み、髪を真ん中から分け、少し色黒に化粧を

していた。

まったくもって「これからご出勤ですか？」状態のホストのいでたちであった。

俺を含む「だんごの楽園」のウェイター5人を蹴散らすほどの格好良さだ。

やはり、コイツはいい女であって、いい男でもあった…負けた…

「聖、早くおいでよ」 友達に呼ばれた聖は、

「んじゃ！そういうことで！あつ、3時からミスコンで女になるから

ヨロシクな！キス…楽しみだな」

俺の肩をポンポンと叩いて友達の元へ行った。

「はい…だんご…」

俺は聖たちのテーブルに団子とお茶を置いた。

「違うでしょ？他のウェイターみたいに、やってよ」

「やだよ…」

聖が団子を俺の持っていたトレーにのせ直した。

「はい！やり直しい」

同じテーブルの子たちもクスクスと笑っていた。

しかたなく俺は

「お待たせいたしました、お姫様。喉に詰まらせないようにお召し

上がり

ください」

このフリーズを考えたのは健児だ…はずかしい…

「じゃ、あ〜ん」

聖が俺に向かって口を開けた。

サービスの一つとして希望者にはウェイターがお客さまに食べさす…  
これも健児の案だ。クウー！。恥ずい！！

「ほらっ、食べ！」

俺は串に刺さった団子を、そのまま聖の口に突っ込んだ。

「んがっ、なにふんのよお」

「調子に乗るな…」

そんなことをしていると、聖の携帯が鳴った。

「あっ？洋ちゃん？どうしたの？」

聖は団子をモゴモゴ食いながら電話に出た。

クラスメイトの洋ちゃんからだった。

「今？城のだんごやさんにいる〜」

城のだんごやさん…って、俺のじゃない！健児のだ！

「ああ？！すぐ、こっちに来て！！」

聖はそう言つと急に立ち上がった。

ドタドタとすごい勢いで息を切らし洋ちゃんが入って来た。

「どづいっこと？！」 聖はあせった顔で洋ちゃんに聞いた。

「ハアハア…い、いまね…ハア、北、き、…み、水う…」

俺は思わず洋ちゃんにテーブルにあつたお茶を渡した。



「ハァー、あのね！風ちゃんが！北高の連中に連れて行かれた！！  
どうしょー！！」

風ちゃんとは、クラスメイトで小柄なぽっちゃりとした聖の仲間だ。  
別名、コロンちゃんとも呼ばれている。

洋ちゃんは続けて言った。

「聖が来るまで風ちゃんを預かっておくって…」

「場所はどこだ！！」

男になつてる…

「なんか、この間のところ…って、そこに来いって…」  
北高といえば、数日前聖がやつつけた細田たちか？！

「わかった！！」

聖は走り出した。

「待て！俺も行く！一人じゃ危ない！」

「どうした！城！」

健児の声にも振り返らず、俺は聖の後に着いた。

俺は正面入り口にある自転車置き場から、サエドンの自転車を拝借  
した。

サエドンの自転車はいつも鍵をかけていないので生徒たちが勝手に  
使っていた。

歩道を走っている聖に追いついた。

「聖、後ろに乗れ！この間のところってどこだ！」

「街外れの廃墟の工場だ！」

俺は聖を自転車の後ろにのせ、指定された場所へ突っ走った。

「城、急げー！今日はズボンだ！ラッキ〜」  
俺の後ろで心なしか嬉しそうな聖の声を聞いた…  
暴れられるからなのか…？

「風ちゃん大丈夫かな、ごめん！風ちゃん！」  
俺の背中がブツブツ言っている聖を乗せ、今までこんなに漕いだこ  
とがないくらい  
ペダルを一生懸命漕ぎ続けた。

## 第十話 風ちゃんを助ける！

廃墟となっている工場の前に着くと聖は一目散に中に入っていった。俺は自転車を投げ捨て追いかけた。

「おらああー、細田ーどこだあ、出て来い！」

聖はまさしく男だった…いや、当たり前だ。

「ほそだああああ」

こだまし、響き渡る聖の声に挑戦するかのようには奥の方から大きなボルトが聖目掛けて飛んできた。

聖はすばやくそれを手で掴んだ。

さ、さすがだ、反射神経抜群だ。

さらにもう一つボルトが飛んできた。

どこから投げているんだ！それは俺のスネに当たった。

「痛えー！ー、いてててー！ー」

スネだよスネー！ー。

「静かにしろよ！」 聖に怒られた。

俺はズボンの裾をめくって自分のスネを見た。

赤くなっている…明日には青だ…

などとスネを擦っている間に聖は奥に向かってとっとと歩きはじめた。

「ま、待ってよ」

俺は怯えつつ聖を追った。

俺はこつこつのは苦手だ、恐いから…

少し行くと広い場所に出た。

そこは天井が高く廃墟になる前は機械が置かれていた所のように  
た。  
30人ほどの男がバラバラと散らばって、ニヤニヤとこっちを見て  
いた。  
その中に細田もいた。

ひえ〜多すぎるよ、相手の人数…

「風ちゃん、彼女はどこだ。返してもらおうか」

聖がそう言うと、一人の男が錆びたロッカーの戸を開けた。

目隠しをされ、体育座りのままクルクルに縛られた風ちゃんが、  
コロ〜と転がり出てきた。

風ちゃん…普段でもコロコロしているのに。

「風ちゃん!!」

聖の声に目隠しをされている風ちゃんはキョロキョロと上下左右に  
首を振って

「ひ、聖ちゃん？聖ちゃーん、どこ〜？あ〜ん」と、涙声で  
叫んだ。

泣き叫ぶ風ちゃんを無視して、細田が話し始めた。

「先日はかわいがってくれて、ありがとよ。ふ〜ん、今日は男みた  
いな格好だなあ。」

その方が似合ってるよ。女のくせしてオレ様に楯突きやがって!

「この間のお仕置きじゃあ足りなかったのかよ…じゃない、かしら  
？」

聖は風ちゃんがいるので女言葉で頑張ろうとしていた。

「今日は彼氏も一緒にようで…？なんか、そうやってるとホモカ

ツプルだな。

男二人にしか見えねーよ、あつはははは〜」

細田が言くと周りの男たちも笑い出した。

細田：おまえの言っていることは間違っていない！

男二人にしか見えないって、男二人だからだ！！うん！

笑いながら細田が言った。

「今日は手加減しねーぞ。かわいがってあげましょうか？聖ちゃ〜ん」

細田の声を合図に

「うおおおおお」と、数人の男たちが聖に襲いかかった。

うわっ！困った！俺はどうしたらいいんだー！喧嘩なんてしたことがない！

「城！あつち行ってる！邪魔だ！」

聖は俺を片手で押しつけた。

聖は襲ってきた数人の男を声も出さずに、順番に殴り、蹴り、投げ飛ばし、

みぞおちに拳を入れたりしながら倒していった。

これも日々、木の人形で訓練している成果なのだろうか。

俺は聖の立ち回りに関心してしまった。

「うわ〜うわ〜痛そう…」

聖にやられ倒れている男達を見て俺の顔は歪んだ…

ポーゼンと立ち尽くす俺のところにも、鉄パイプを握った二人の男が大声を出しながら襲ってきた。

ヤ、ヤバイ！俺のところに来るー、と思った瞬間、  
聖が一人の持つている鉄パイプを掴み、そのままそいつを投げ飛ばした。

男が手を離れた鉄パイプは聖の手に残り、もう一人の男の脇腹をえぐった。

「ううー」 苦しそうな男は、そのまま倒れもがいていた。  
聖が持つていた鉄パイプを捨てると、それは俺の足元にコロコロと転がってきた。

俺は一応その鉄パイプを拾って両手で握りしめた。

次々と細田の仲間が、聖に向かって襲い掛かってくる。

それに合わせるかのように聖も勢いよく男達に向かっていき、倒していった。

男の一人が聖の後ろに回りこみ、殴ろうとしていた。

鉄パイプはこういう事に使うんじゃないかってよ

と、少し反省しつつ、俺は思わず持つていた鉄パイプで、そいつのお尻を力を込めて叩いてみた。

そいつは痛かったのか、お尻を押さえつつ倒れた。

「サンキュー、城！」

聖はウインクをしながらそう言った。

「あーい、いや〜てへへ〜」

聖の微笑みに俺は少し照れた。

お尻を押さえていた男が立ち上がるうとしていたので、今度は両足のスネを鉄パイプで殴った。

「ぎゃーおおおお」

そいつは痛さのあまり転がりながらスネを擦っていた。

うんうん、スネ打ちは痛いよな。さっきの俺と一緒に！

聖は見事な身のこなしで細田以外の男を全部倒した。

俺は転がっている男達を避けながら聖の後ろに立った。

細田に近づいて行く聖に、細田の目は泳いでいる。

「細田くん…あんたさあ、ふざけたことしてくれちゃって…」

「い、いや…ちよ、ちよつとまで…」

聖が詰め寄ると細田が後ずさりをした。

「ほ…そ…だ…くん」 聖は楽しそうに細田を呼んだ。

細田は急に後ろを振り向き逃げようとした…が、壁があつて顔面を強打した。

「っつーーー」

痛かったらしい…ま、まぬけだ。

聖は顔色一つ変えず、笑いもせず、左手で細田の前髪を掴み壁に後頭部を

押し付けペチペチと二度ほど軽く頬を叩いた。

そして聖は、ズボンのポケットに手をつ込み何かをゴソゴソと探した。

聖はニヤツと口角を上げ、ポケットから出した右手で細田の額に

「い…ち」ビシッ 「うおお」 細田が叫んだ。

「に…い」ビシッ 「ぎゃー」 細田が叫んだ。

「さ…ん」ビシッ 「うぎよ…うううう」 細田が泣いていた。

聖の強烈なデコピン攻撃に、細田の額は異常なほど赤くなって、腫れあがった。

聖の右手中指にはスカルが掘られたシルバーの指サックがしてあった…

い、いつも持ち歩いているのかー！ー！！

その後、

「あちよ~~~~~おおお」と言いながら聖は細田のみぞおちに

すばやいチョップを浴びせ、足をかけ、仰向けにひっくり返した細田の胸元に  
留めの一発をプレゼントした。

細田はぐったりとしつつ、震える手でポケットから白いハンカチを出して振った。

降参したようだ。

聖はそのハンカチを奪い取り広げ、細田の顔にかぶせた。

「風ちゃん！大丈夫？ごめんね！」

聖は風ちゃんの所に駆け寄り、目隠しと体を縛られていた紐をほどいた。

俺は足元の細田を見下げ、

聖：これはまずいだろう…白いハンカチを顔にかぶせるなんて。

と思い、細田の顔からハンカチを取り、三角にして赤く腫れた額の上に

のせ直してあげた。

これで、よし！！

「聖ちゃん、恐かったよお」 風ちゃんは泣いていた。



「ごめんね、風ちゃん。私のせいで怖い目にあわせて…」  
聖は風ちゃんを抱きしめ何度も謝っていた。

俺たち三人は廃墟ビルを出た。

太陽の光が眩しい。

入り口に乗り捨てたサエドンの自転車を起こした…  
げっ！やばい！

元々古い自転車だったが、勢いよく投げ捨てたのでハンドルが曲が  
って  
しまっていた。

しかたがない、サエドンにちゃんとあやまろうっ…

## 第十一話 青春満喫中

学校に戻ると、校門の前で健児たちクラスメイトがウロウロしていた。

「聖ー」

「風ちゃん」

「城!!」

「大丈夫だったのか!よかった」

洋ちゃんから事情を聞いた健児たちだったが応戦しに行くにも場所がわからず、

俺たちの帰りを待つしかなかったらしい。

「すまん!助けに行けなくて!」 と健児たち男子が俺に謝ってきた。

「あやまるなよ、あやまられても困るよ」

俺はそう言うのが精いっぱいだった。

健児たちの気持ちだけで俺は嬉しかった。

みんなの話を聞くと、聖を気に入った細田が聖を自分のモノにしよつとし、

仲の良い風ちゃんを人質に聖を呼び出した…ということになった。

「みんな、心配かけてごめんなさい。城と一緒に行ってくれて助けてくれて…私一人だったら、いまごろ…うつ…」

聖が泣き出し、女子たちが、とにかく無事でよかったとなくさめた。

聖の涙は…うそ泣きだ。俺だけは知っている!!

人質だった風ちゃんは、目隠しされて何も見えていなかったため、俺が横縦北高の連中をやっつけ、聖と風ちゃんを助け出したヒーローになっってしまった。

「あつ、聖！ミスコン！！」

「そうよ！早く仕度しなきゃ！」  
女子たちが騒ぎ出した。

「ドロドロだから、とりあえず更衣室でシャワー浴びよう！」

「私たち、手伝うから」

「うん…えっ？！ええ？手伝う？！」 聖があせった。

「そうよ、シャワーと着替え！早く早くー」

それは非常にやばいです！女子のみなさん。

「あつ、大丈夫よ。一人でできる…！しいいいい」という聖をひっぱって

女子たちは更衣室に向かった。

俺の方を振り向いた聖の顔は、凍っていた。

「城、おまえも着替えて来いよ。団子屋もすでに店じまいしてるし健児に言われ、俺は男子更衣室でシャワーを浴び、制服に着替えて教室に戻った。

カメラを首からぶら下げた石田が教室に入ってきて言った。

「なんか、サエドンが自転車の前で落ち込んで打ちひしがれてたよ」  
石田の言葉で思い出した！！

「俺だ！さっき自転車借りて、ぶっ壊しちまったんだあ」

俺はサエドンのところに謝りに行った。

自転車の前で立たずんでいるサエドンを見たとき、心が痛んだ。

「先生、ごめんなさい。俺です、自転車壊したの」

「いいんだ…こいつも、もう寿命だったんだろう」

サエドンはマジ泣きモードだった。

俺が壊してしまった自転車は12年前に初めて卒業生を送り出した時、

生徒たちが、お小遣いを出し合いプレゼントしてくれたものだった。

だったら、ちゃんとカギかけとけよ…

と、言いたいところだが、サエドンの涙で大切な自転車だったということは

分かった。

俺は教室に戻り、みんなにサエドンの自転車の話を少ししんみりさせてしまった。

「じゃ、今度は僕たちが自転車をプレゼントしようよ」

石田が言い出した。

「でも、壊したのは俺だ。俺が弁償するよ」

俺が言うと、

「別に弁償とかじゃなくて、オレたち3Bからのプレゼントにすればいいさ」

「そうだよ、サエドン、担任だしいい先生だし」

「だよな〜、文化祭終わったら、みんなで相談しようぜ」

みんなが言い出した。

そして健児が教壇の机に手をつけて言った。

「それに！今日のことは城だけの責任じゃない。場所さえ、わかっていたら

俺らだって北高と戦うために、誰かが自転車乗ってぶっ潰してい

たかも

「しれないしな!!」

なぜか教室の中の男子たちは、青春満喫中だ。

「ありがとう、みんな!!」

俺はみんなのありがたい言葉に泣きたかった。

友情を確かめあっている教室に女子たちが聖を連れてドヤドヤやって来た。

「じゃじゃじゃ〜ん!おまたせ!」

「ミス龍星、間違いなしの3Bのアイドル・聖ちゃんの登場です」

教室に入って来た聖は、ま、まぶしかった

バックに薔薇の花がクルクルと回っているようだった。

男子からは歓声があがり、みんな写メを撮りはじめた。

石田にいたっては、首から提げてた一眼レフを構えシャッターを押しっぱなしだ。

「きゃ〜ん、みんな、恥ずかしいよ」

聖は照れていた。

廃墟で見た聖の怒髪衝天は俺の中で抹殺しよう。

「ん!!やっぱりお似合いだね!聖と城くんは!」

女子の一人が言うと、みんながうなづき始めた。

俺は微妙な気持ちになった。

石田の携帯が鳴り、ミスコン実行委員会から召集がかかった。

石田と聖は先に行き、俺たちも体育館に向かった。



## 第十二話 高校最後の文化祭

体育館に行くとするでに人で埋め尽くされていて3Bのみんなは、立ち見になった。

俺は賞品なので舞台の袖に移動した。

暗幕がかかった体育館の照明が落とされ、ミスコンが始まった。

最終で残った15人の龍星の女子生徒が順番に舞台上がり、12番目の聖が

マイクの前で自己紹介をした。

「3年B組、崎田聖です。趣味は、かわいい物を集める事です！」  
会場の男子から「やっぱりなあ」「みたいな声が聞こえてきた。

本当はカンフーグッズ集めです。

俺は心の中で合いの手を入れてあげた。

「好きな教科は、英語…かな？」 首をかしげ、かわいく言った。  
男子たちが「か、かわいい」と、ざわめいた。

本当は体育のみ！ですから！！

「好きな男性のタイプは…、んーと、何かあった時に私を守ってくれる人！」

またまた会場の男子からハートのどよめきがおこり、3Bからはヒューヒューと

指笛がなった。たぶん、俺への指笛だ。

みんな…聖は自分の身は自分で守れるヤツですから！それに…俺は聖に

守られた身だ！すまん！3Bのみんな！！

司会者が聖に質問をした。

「彼氏とかは、いますか？」

「います。一人！ポツ」俺の事だ…

体育館が、どよどよと溜息まじりにどよめいた。

「では、崎田さんに特技を披露していただきましょう」司会者が言った。

特技…って？まさか又ンチャクとか披露するんじゃないだろうな。

俺は少し心配になったが、舞台袖からピアノが押されて出てきた。

聖はピアノの前に座り、ゆっくりと弾きだした。

その曲は、とても難しいとされているソナタの一つだった。

聖…おまえは又ンチャクだけでなく、ピアノもできるのか！！

ピアノまで、いとも簡単に操っていた。

いつも手をつないでいる時思っていた。指先の長さや手の細さ。

ピアノのせいなのか。

聖、おまえはなんでもできるんだな…

俺は少し落ち込んだ。

俺の特技と言えば、「たて笛」くらいだ。

人前では見せられないが、鼻でも吹ける…

聖のピアノ演奏が終わると、会場から割れんばかりの拍手が起こった。

このあとで出てくるミスたちが可哀相なくらい、聖の登場は盛り上がった。

結果は、言わずと知れた「崎田 聖」だった。



優勝のティアラが頭にのせられ、校長からトロフィーと食券2000分が手渡された。

きつと校長の内心は複雑だろうなあ。

と、思ったら、校長の顔はニコニコとしている。

「では、優勝者へのもう一つの賞品！龍星高校一のいい男、3Bの大岡城くんから

聖さんへ熱くくいキスを贈っていただきましょう！！」

司会者の声に合わせて、俺は舞台上上がった。

会場は、モリモリモリに盛り上がり、俺は聖の前に立った。

女子たちはキヤーキヤー言い、男子たちは俺に野次を飛ばしていた。

男子たちよ…勝手に野次でもなんでも飛ばしてくれ。

ふと、舞台下を見たら石田が舞台かぶり付きでカメラをかまえていた。

望遠…使ってるよな、石田。どんだけドアップなんだよ…

「イエ〜〜イ、く〜ちびる！く〜ちびる！」

そう言いながら手拍子を始めたのは健児の声だ。

健児の声に誘われるかのように、みんなが手拍子をしはじめた。

む、無理だ！それはできん…俺たちはまだ高校生だ。未成年だ！

風紀にそぐわない！それにサエドンや他の先生たちも、見て…

い…る？こ、校長だつて……うげげー

サエドンや先生たち、校長までも手拍子をしているううう。

う、うそだろー、教育上よくねーだろ！

いいのー、いやいや良くない。

俺がファーストキスするなら女子希望だ。  
聖は男だ！

「ちゅっ！」

えっ？えっ、ええー！！

俺が一人でいろいろ考えている最中にいきなり、聖が俺のくちびるにキスをしてしまった。

「ぐずぐずしてっから！」 聖は小声で言った。

会場は俺の心も知らずに、大喜びなのかよくわからないが、大騒ぎの中

俺はトボトボと舞台袖に戻った。

俺のファーストキスが…

打ちひしがれていると、後ろから肩を叩かれた。  
振り向くと校長が立っていた。

「大岡くん、お疲れだったね〜盛り上がったね〜楽しい文化祭だったね〜うっほほ」

と言い、うれしそうに笑いながらどこかに消えていった。

校長と入れ替わりに聖がトロフィーと食券2000円分をピラピラさせながら

俺のところに来た。

「やっぱ、オレが優勝しちゃったな！城のファーストキスいただきました〜」

と俺の耳元でささやいた。

うっ…

俺は肩をガツクリ落とした。

でも、聖のやわらかい唇の感覚は残っていて、それがまた俺を落ち

込ませた。

俺の唇は記憶形状唇だ。

俺と聖が体育館を出ると3Bの連中が待っていて、聖の優勝を祝福した。

健児たちは俺のところに来て、聖とのキスはどうだったとか、いろいろ聞き

まくってきた。

「キスはあいさつだもん！いつもしてるもんね、城」  
聖はそう言つと、また女子たちと話はじめてしまった。

や、やめろー、うそを言うでないいいい。

俺の言葉も届かずその直後、男子たちから手痛い仕打ちをいただいた。

やっと、長い一日が終わり、そして高校生活最後の文化祭も終わった。

### 第十三話 聖が好きだ！

文化祭が終わり、4日後、俺たち3Bはサエドンに新しいママチャリを

プレゼントした。

サエドンはHRで大粒の涙を流し喜んでくれた。

女子はもらい泣きをし、聖を見たら…泣いていなかった…

俺の視線に気づき、聖がこっちを見て「うっ…」と目頭を押さえたが、

うそ泣きだ。やっぱり根性は男だ。

その日の放課後、聖と校門近くに行くと女子たちがキャピキャピと騒いでいる声が

聞こえた。

「何？なんの騒ぎ？」 聖が近くにいた生徒に聞いた。

「あのね、林林高校の日野くんが来てるの〜」

「林林高校の日野？」 聖が俺を見た。

林林高校の日野といえば、メンズファッション誌でたまに読者モデルをしている

地元で有名ないい男である。

「地元の女の子たちのちょっとしたアイドルだよ」 俺は聖に教えた。

「ふ〜ん。何しにきたんかね、オレらには関係ないから行こーぜ」

聖はそう言つと、俺の手を引っ張って校門出口に向かった。

日野の姿が見えた。女子に囲まれてニヤけた顔で対応していた。

俺と聖が横を通り過ぎようとした時、

「ちよ〜と、まったあぁあ」

日野がいきなり俺たちの所に来て、聖と俺のつないでいる手を上げ、引き離れた。

「な、なにするんだよ！」 思わず俺は怒鳴った。

「はぁ？なにすんですかぁ？」 聖も日野に言った。

「聖ちゃん！僕と付き合ってくれたまえ！っていうか、こんな男より僕の方が

数倍カッコイイいいしい、有名だし、聖ちゃんに似合う男は僕しかない

から、僕と付き合いなさい！」

そういうと日野は、いきなり聖を引き寄せ、こともあるつかキスをしようとした。

あせった俺は、聖と日野の間に入り聖を体で包み込むように自分のところに

引き戻した。

「俺の女になにすんだよ！」

自分でもびっくりしたが、俺の女とか言ってしまった。

日野は髪型を直しながら

「今は君の…城くんの彼女かもしれないが、それもあと少しのことだ。

もうすぐ聖ちゃんは僕の彼女になるからさっ」

そう言つと聖の方を見て微笑んだ。

男の俺が言つのもなんだが、その微笑は…格好よかった。

女ならイチコロコロリンだろう。

「私の好きなのは、城くんだけだから。あなたの彼女になることは一生ないですから!!」

聖が日野に言った。

好きなのは城くんだけ、城くんだけ、城くんだけえええ

俺の頭の中で聖の言葉がリフレインを繰り返した。

俺は緩んだ顔を引き締め

「フーことだから、悪いな日野くんとやら。俺たちもう帰るから」

「行くぞ、聖」

俺は日野に言い、聖の手を引っ張りその場を離れた。

「聖ちゃん、また明日来るから」

後ろの方で日野が叫んでいた。

「ったく、なんだよ。アイツ！ふざけやがって」俺はドスドスと歩いた。

「あー、城、やきもちやいてんだあ。城、オレのこと好きなんだあ」聖がからかうように言った。

ええっ?! やきもち? 好き? 俺が聖に? があああ、どうしようおおお。

俺はその場にしゃがみ込み、頭を抱えた。

「お、おい…おい! 城、みんなが見てっぞ! 立てよ、どうしたんだ」

俺はしゃがんだまま顔を上げ、聖の顔を下から見た。

好きなかもしれない。こいつのこと…

俺は好きなんだ、聖のことが。

日野が聖にキスをしようとした時、俺は本気で阻止しようとした。

聖が他の男と…考えられない…

「おい城くん、どうしましたか？」

聖が俺のつむじを突付いた。

俺はガバツと立ち上がり、聖の手を取り

「痛いよ、手、おい…」 聖の声も耳に入らず黙ったまま急ぎ足で歩いた。

マンションに着くと、そのまま自分の家に行きリビングに入った。おふくろだけだと思ったら、おやじもいた。

俺は二人に向かって叫んだ。

「俺は聖が好きだ！本気で好きだ！！」

そう宣言して、口があんぐりと開いた3人を残し、自分の部屋に入り、

カギをかけて「うわああ」と言いながらベッドにもぐった。

男を好きになっちゃってしまっなんて…俺はおかしいのか！！

いつからか、「聖は男なんだから好きになるな」と自分に言い聞かせてきた。

最初はそれで納得していたが、自分に言えば言うほど聖を好きになっ  
ていった。

自分を押し殺していた俺の気持ちは抑えきれなくなった。

誰かに言いたかった。

俺は聖が好きだと、本当のことを言いたかった。

男でも女でもどっちでもいい！聖が好きだと…

しかし、それをよりによって両親の前で宣言するなんて…

俺はもう…おしまいだあ。

しばらくすると、ドアをノックする音が聞こえ、

「城？」

「城！」

「じよ〜〜」

とリビングに残してきた3人が順番に俺の名前を呼んだ。

俺は何も言わず、身動きもせず布団を被ったままベッドに伏せていた。

「城、開けるよ…」聖だ…うっ、あわす顔がない。

ドアなんて開けられないよ。

何度か聖は俺の名前を呼んでいたが、いつしか聞こえなくなった。そして俺はそのまま寝てしまった。

目が覚めて時計を見たら深夜12時を回っていた。

夢だったらよかったのに…

俺はそう思いながらトイレに行くためにドアを開けた。

ドアの前に、おにぎりが三つトレーにのって置かれていて、メモ書きが添えられていた。

「オレが城のために作ったおにぎりだ。食べ！明日の朝はいつもの時間に

ちゃんと来いよ。聖」

と書かれていた。

聖が俺のために作ってくれたおにぎりは、ずいぶんと大きかった。俺はトイレに行くのも忘れて、その場に座って食べ始めた。



おにぎりの具は、梅干とおかかと…し、塩？だった。

具の部分に塩の塊が入っていた。

俺は泣きながら食べた。

なぜか涙が止まらない。

しょ、しょっぱい。しょっぱすぎる…うっ。

涙のしょっぱさではなく、間違いなく塩のしょっぱさだった。

## 第十四話 城、オレもだ！

恥ずかしさを我慢して、俺は次の朝マンションロビーに下りて行った。

朝食の時、おやじとおふくろは普段と変わりなく過ごしてくれていた。

ロビーには、いつも後から来る聖が先に来て待っていてくれて

「おはようー！」 いつも通りの聖がそこにいた。

「お、おはよう…！」 俺は、カMEMシくらいの小さい声で言った。

聖の顔が見れなくて、横を通り過ぎて行こうとしたら聖が手をつないできた。

俺は振りほどこうとしたが、聖がものすごい力で握り、離そうとしなかった。

うっ…この握力には負ける。

「ちゃんと、おにぎり食ったか？」

「うっ…ん」 俺はまたカMEMシ音量で答えた。

「お母さんに手伝ってもらって一生懸命作っただからな」

「うっ…ん」 俺の声はミジンコ音量になっていた。

「しょ、しょっぱかった…」 俺はボソボソと言った。

「ははは〜。あれ、お母さんのアイディアだよ。昔、お父さんと喧嘩したときに

お父さん部屋にこもっちゃったんだって。喧嘩してたけど、やっぱお母さん

心配で、おにぎり三つ作って、その一つに塩の塊入れたんだって」

おふくろ、よくそういうこと考えるよな…

「でも、お父さんちゃんと食べてくれたって。それで仲直りしたらしいよ」

おやじも…食べたのか。

聖は続けた。

「城、おまえもちゃんと食べてくれたのか？まあ、オレらは別に喧嘩したわけじゃ

ないけどさあ」

「うん…三つとも食べた。…うまかった…」 俺が言つと聖は

「そうか！サンキュー」と言い、学校に着くまで聖は俺の手をギュッと

握つたまま一度も離さなかった。

学校の門近くに来ると、チリンチリンと後ろから自転車のベルが聞こえた。

「いよー！お二人さん。今日も仲良くお手手つないで登校かい。」

青春だねえ！うらやましねえ」

と、サエドンがいつもの大きな声で、3Bからプレゼントされた自転車に乗って

うれしそうに通り過ぎて行った。

通り過ぎたサエドンの後姿を見ていたら

「ずっと一緒だから…」

「えっ？」

聖の言葉に俺は今日初めて聖の顔を見た。

「オレら、この先もずっと一緒だから。オレもおまえのこと好きだ

し」

ええ！いい、いまなんて？好きって、好きって言った？

「浮気すんなよな。特に他の男に走ったら、おまえ北高の細田みたいに  
なるからな」

「もう一度、言ってくれ！」 俺は聖に言った。

「なにを？」

「さっき言ったこと」 俺は詰め寄った。

「浮気したら、北高の」

「ちがう！その前だ！」

「…いいだろ、さっき言ったんだから…」 聖は照れているようだった。

「いいから、もう一度言え！」

「…オレも、おまえのことが…好きだ」

「ま、マジ？」

「マジ…」

俺は思わず、校門の前で聖を抱きしめた。

「ちよっ、おい、みんな見てっだろーが」

俺は聖をもっと強く抱きしめていた。

聖は振りほどこうとしたら簡単に俺の腕なんて離れられたはずなのにそのまま俺の腕の中にいた。

その日、校内は昨日の「日野告白事件」と「朝の校門前ラブシーン」の  
話題で持ちきりだった。

朝、俺と聖が抱き合っていたと言っ話、3時間目ではキスをして  
いたという

話になり、4時間目辺りにはプロポーズをし卒業したら結婚する、  
ということ  
なっていた。

そして、昼休みが終わるころには、聖が妊娠している…というわけ  
のわからぬ

噂が上っていた。

妊娠説はいくらなんでも行きすぎだ、と先生達も苦笑していた。

ありえないし…

サエドンはひっくり返って笑っていた。

## 第十五話 日野からの挑戦状

放課後になり、石田に試験勉強を教えてもらうため、俺と聖、健児、ポディビル部の相川でファミレスに行く事になった。

今日も校門が賑わっている。

俺のいやな予感は当たった。

…日野だよ。

女子に囲まれている。

「ホントに今日も来てる」 聖が言った。

「何考えてんだか…」 健児があきれて言った。

今日は3人ほどの仲間を連れて来ていて、これがまた粒ぞろいのいい男だったため、女子は大喜びだ。

「あつ！聖ちゃん」

日野が、聖を見つけて近寄ってきたので俺は聖を後ろに隠した。

「ちょっとちょっと、城くくん。また邪魔する気？困ったちゃんだねえ」

うわ、うわゝなにその上から目線。同じ高3だろーが！

「あのさあ、この二人付き合ってたんだよ。邪魔なのはおまえだろーが」

健児がムツとして日野に言った。

「あつ、君は関係ないから、あつちへお行き」

日野は健児に向かって、手でシュシュッと追っ払うジェスチャーを

した。

「なんだとお、テメエー」

殴りかかって行こうとした健児をみんなで止めた。

「健児、やめる。学校の前だ、暴力はダメだ」

俺が健児に言つと、ふくれっ面になった。

「私、昨日も言っただけど、あなたと付き合う気ないし。城とずっと一緒に

いるつもりだし」 聖が俺の後ろから顔だけ出して言った。

うっ、聖い、かわいすぎるぞ！つと。

「もういいかげんにしてもらえませんか？日野さん、本当にめいわ言いつまらない俺の言葉を遮るように日野が言った。

「やだやだやだー」。僕は聖ちゃんと付き合う！僕とのツーショツトが

一番似合うのは聖ちゃんだけだああ」

日野は地団駄を踏んだ。

おいおいおい、それじゃただの幼稚園児だよ、キャラおかしいし。回りにいた女子たちも、日野の新しいキャラに少し引き気味になった。

「じゃー、ごうしよう、城くん！…おい、出せ！」

日野はそう言つとお付の男から一枚のプリントを受け取り、俺の顔に押し付けた。

「近すぎて見えないんですけど…日野さん」

「あっ、これは失礼。これで勝負だああ、城くん！」

俺はプリントされた紙を取り読んだ。

「第5回イケイケメンメン・イケメンコンテスト プレゼンツBY  
点々社」

それは人気メンズ雑誌が年に2回行っイケメンコンテストの募集の紙だった。

「どうだ！これで優勝した方が、聖ちゃんを彼女にする」

日野は意気込んで言った。

俺はプリントの紙を日野に投げつけて言った。

「あのさあ、日野さん。聖は物じゃないし、優勝した方が、って、はじめから

俺の彼女なんだよ！！聖は！！！」

俺はだんだんムカつき怒鳴った。

「あつ、自信がないんだあ。負けるとわかっているコンテストには出ないんだあ、

ふ〜ん、へ〜、そうなんだあ」

日野は落ちたプリントを拾い上げながら言った。

日野の挑発に乗るわけにはいかないが、

「ぶざけんなよ！日野！だまってきてりゃー」

俺はそう言い、日野の胸倉を掴もうとした時、聖が俺の前に出てきて言った。

「わかった。もし、コンテストで城が優勝したら、日野さんは二度と私たちの前に現れないのね？」

ええ！聖、どうして、そういう方向に話を持っていくんだあ。

「いいよ。まあ、僕と聖ちゃんの前から消えてもらうのは、この城くん！」

「なんだけどねー！ピシッ！」



日野はそう言うと、人差し指で俺の顔をさした。  
聖は日野の手からプリントを剥ぎ取った。

「あっ、ちなみに僕はすでに応募済みだから。締め切り、明後日だから」

早くした方がいいよ、城！！くん！！ピシッ」

日野はまた俺を人差し指で指していった。

人を指指しちゃダメって親に教えてもらってないのかよ、こいつ。

「行こ！城」

聖は俺を引っ張って大股で歩きだした。

## 第十六話 挑戦状、お受けいたしました

俺たち5人はファミレスに行ったが、試験勉強どころではなく、テーブルの上に、応募要項のプリントと応募用紙を二枚並べ頭をつき合わせて見ていた。

「日野もご丁寧に応募用紙まで用意してくれるなんて、笑うぜ」  
健児は鼻先で笑った。

「城くん、これ、顔と全身写真2枚送らなきゃいけないんだけど、持ってる？」

石田が聞いてきたが、

「無い！」 俺はきっぱり言った。

「・・・」

「よし！では、みんなで僕の家に行きましょう。そして今日中に全てを整えて

ポストに投函するのです！」

石田は自分の一眼レフのデジカメで写真を撮りプリントアウトする  
と言い、

俺たち5人はファミレスを出て、石田の家に向かった。

石田の部屋はプロレスのポスターだらけであった。

聖は「すごい！すごい！」と大喜びで

石田は「いやあ、そ、そう？」 とクネクネと照れていた。

さっそく石田と相川は俺の写真を撮るこしにして、聖と健児は応募  
用紙に

必要事項を記入することになった。

「全身写真って、制服でいいのかな」俺が言うと石田が

「じゃ、僕の服を貸そう」そう言ってクローゼットを開けた。俺は少し覗いてクローゼットを閉めた。

「や、やっぱ、制服のままです…」

石田の私服はなぜだかタータンチェックばかりであった。

「あつ、こっちにもあるけど…どうかなあ」

と石田が今度は部屋の奥にある扉を開けた。

見に行くと、そこにはアニメやマンガキャラのコスプレの衣装が並んでいた。

「……」

全部石田の手作りで、文化祭で聖が手伝ったアニメ部のコスプレ衣装のほとんど

が石田が提供したものだっらしい。

また新たな石田を発見してしまった。

「き、き、器用なんだね…石田って…」俺が言うと

「えっ？そうかなあ…照れるなあ」石田は顔を赤くしていた。

「やっぱり普段通りの自分を出すために制服にするよ…」俺の言葉に

「そうかあ？残念だなあ」

石田は寂しそうに言い、クローゼットを閉めた。

「軽く化粧でもした方がいいんじゃないのか？写真写りよくなるしな。」

聖ちゃん、化粧品とかもってない？」相川が聞いた。

「ない！、私お化粧とかしないから」

持っているわけがなかった。

すると、テーブルの上にドンツ！とメイクボックスが置かれた。  
……い、石田だった。

「コスメには化粧道具は必需品だ！」

石田の微笑みが恐かった。

石田！おまえこんなものまで持っていたのか！！

みんなは石田を褒めたたえた。

血色良く写るようなメイクを石田がしてくれた。

こいつは将来何になりたいのだろうか！

石田に顔をいじくられながら、俺は石田の将来を心配した。

「おい！城。おまえの特技ってなんだ？」 健児が聞いてきた。

「えーっつと、た、たて笛かな？」 俺が言うと

「やっぱり特技とかは男らしいものにしようよ！」

「じゃ、これはオレらが勝手に決めておこう！」

俺のたえ笛の特技を無視するかのように聖と健児が言い、二人で相談し、

用紙に書き始めた。

その間に俺は写真を撮り、石田と相川がパソコンで加工処理を始めた。

「できたよー、城」 聖が用紙を見せてくれた。

趣味…：体を鍛えること

特技…：ヌンチャク

座右の銘…：正義は必ず勝つ！

これはまるつきり聖、おまえ自身のプロフィールじゃないか！  
俺は聖を見た。

聖は首を横に倒して「テヘッ」と微笑んでいた。

「待て！正義は勝つはいいとして、俺、体鍛えてないし又ンチャクなんて

やったことないよ」

俺が訴えると、

「あゝ大丈夫大丈夫。これから鍛えればいいんだから！」  
と、健児が涼しい顔をして言った。

「こつちも完成だ！」 相川が出来上がった写真を持ってきた。

「うおおおお、すんげー、日野も真っ青だぜ！」

健児が喜んで言った。

「本物の城もカツコイイけど、まずは一次審査突破のためには、これくらいの加工は

必要よね。あとは二次審査までに、もっともつと格好良くなって体鍛えなきゃね！」

聖の目が妙に光っていて、俺は少し身震いをした。ブルツ。

写真を見て驚いた。

写真の中の俺は一輪の薔薇を手に持っていた。部屋のどこを探しても薔薇なんてない。

いつの間に…。

しかし、自分で言うのもなんだけど写真の俺は、そうとうイケていた。

石田…おまえの加工技術に天晴れだよ。

その後、応募準備が整い、なぜだか応募用紙が入った封筒を持った俺を中心に

5人が並び記念写真を撮った。

石田の家から駅に向かう途中、ポストに投函した。  
5人で赤いポストを囲み、拍手を打ち拝み倒した。

## 第十七話 向かうところは…？

次の日、学校に行くとき健児たちが俺に一冊のファイルを見せた。学校内での一日のスケジュールと、一週間分の食事の献立と、その他もろもろ体力作りのための注意事項などが書かれていた。

「な、なんだよ。これ」

みんなが俺を囲み言い始めた。

「まっ、一次は問題なく通ると思うんだが、二次審査でさあ、特技披露とかに

なると思うんだよ。だからちゃんと特技修得しとかなきゃな！」

「これから毎日、このスケジュールで生活してもらおう」

「献立は一週間ごとに新しいの渡すから」

健児が昨日家に帰ってから、クラス全員に連絡網を回し事情を説明し全員の

協力を得たらしい。

料理部の女子に栄養バランスの摂れた献立を作ってもらい、いい感じで筋肉が

つくようにボディビル部の相川には、休み時間を利用して指導してもらったことになっ

ていた。俺の知らないところでみんなが勝手に動き始めている。

こんなことなら特技は「鼻でたて笛を吹く」にしておけば良かった。

HR始まりの鐘がなり、サエドンが教室に入ってきた。

「健児！これでいいかあ〜」  
サエドンは、そう言うのとダンボールを机の上に置き、  
健児と男子たちがダンボールの中をチェックし始めた。

「完璧ツスよ〜先生！」

中から出てきたのは、左右にビヨ〜ンと伸ばす腕を鍛える道具など  
いろいろと  
入っていた。

そしてサエドンが

「これは俺からの心ばかりの品だ！受け取れ、城！」

じゃ〜ん、と言ってプロテインを袋から出した。

みんなはサエドンに拍手をしていた…

「よかったね」と隣の席で聖が喜んでいた。

サエドンまで巻き込んでるよ。

俺は窓の外の遙か遠くを見つめた。

そして、その日から俺は大学受験の勉強をしつつ、体も鍛えていく  
事になった。

朝夕の食事は、女子が作ってくれた献立表を見ながらおふくろが作  
ってくれ、

学校では、各授業の後半10分は空気椅子で授業を受け、休み時間  
はみんなの声援

を受けながらボディビル部の相川に、いかにすれば筋肉が格好良く  
見えるかを

指導してもらった。

夜は、聖の部屋で手取り足取りヌンチャクの指導を受けた。

12月になり、一次審査の通知が届いた。

「と、通ってるう」

聖はもちろん、おやじとおふくろ、クラスのみんなが喜んでくれた。

俺の体は目を追うごとに筋肉が付き、聖より腹筋が割れてきていた。

「城くすげーな。オレより良い体になってるよ」

聖は俺の筋肉に触って言った。

うっ、やばい。さわるな。おまえに触られると…反応してしまっ…

「オレのために頑張ってくれてんだな。なんか、うれしいよ」

そうだよ、そうだよ。日野におまえを取られないように俺は聖のために

頑張っているんだよ。

俺は聖を引き寄せ、抱きしめようとした時、

「聖ちゃん…」と、聖を呼ぶ声がし、部屋のドアが開いた。

「…」俺は固まった。

大きな箱を手にしたおふくろが立っていた。

「あらまつ？ごめんなさいくラブラブ中だったかしら？」

おふくろは、慌てるでもなく出て行くわけでもなく普通に話続けた。

「ところでね、聖ちゃん。ちょっとこれ、どうかしら？」

「何々？お母さん」 聖は俺から離れ、おふくろが持ってきた箱を開けた。

箱からは白い布地が出てきた。

「きゃく、ステキ！」 2オクターブくらい高い聖の声がした。

手にしていたのは、ウエディングドレス…だ。

俺はボーゼンとした。なぜ、今、ウエディングドレスなんだ。

っーか、聖おまえ興味ねーだろーが。



「でしょ？でしょ？これね、ママが着たものなんだけど、聖ちゃんに似合うかなあ」

「って、思ってもってきたのお」

「わーい、着てみていい？」

「うんうん、もちろんよ」

「ちよつと待て。聖、そんなもの貰ってどうすんだ。いつ着るんだ。」

「俺はシャドーボクシングをしながら、横目で見ていた。」

「おふくろは嬉しそうにドレスを着せていた。」

「あー、胸のところブカブカ…」

「聖、残念ながらおまえには胸の膨らみはない！」

「そうね〜なんか詰めときゃいいわよ！」

「そう言うとおふくろは、聖がさっきまで着ていたTシャツをグイグイと胸の部分に」

「押し込んだ。」

「あ〜ん、聖ちゃん、やっぱり似合うわあ。ちよつと筋肉質だけど体の線が」

「何気なく細いからぴったりだわ！あつ、パパ呼んで来よう〜」  
「おふくろはおやじを呼びに言った。」

「城、どうだ？オレ似合うかあ？」  
「聖がクルリと回って俺に聞いた。」

「ああ…」

「似合いすぎて、かわいさのあまり直視できず俺は右！左！と空気にパンチをしながら」

「テキトーに相槌を打った。」

「なんだよ、感動薄いやつだなあ」  
「聖はむくれて言った。」

バタバタとおふくるとおやじが来た。

「ほらほら、パパ見て見て」

おふくろは自慢げに聖をおやじに見せた。

「うわあ、いいね、かわいいよ！」

「でしょ？でしょ？」

「これでいつでも嫁に来れるな！」

「そうよね、パパとママはいつでもウエルカムよ、聖ちゃん！」

わからねー、俺は本当にこの夫婦がわからなくなってきた。

「え、私ここにお嫁に来てもいいの？」

ひ、聖なにを言い出す！俺は確かにおまえが好きだ。

だが、それとこれは別問題だ。

「男は18才からだったよな、結婚できるのは…」

おやじ…男同士は何歳になっても婚姻届は出せねーんだよ…

この国ではまだ受理してもらえねーんだよ…

俺の心を無視するかの様に、三人の会話は弾んでいた。

「おっ、そうだそうだ。写真！おい、城、聖ちゃんと並べ」

おやじがポケットからデジカメを出して構えた。

ウエディングドレス姿の聖と俺のツーショットを撮った。

そしてカメラを固定し、四人並んで撮った。

俺だけ上半身裸で手にはボクシング・グローブをしたままだ。

試合にも負けて、勝負にも負けた弱弱のボクサーみたいだった。

## 第十八話 戦いはこれからだ！

俺の体力作りは、期末試験が終わり、クリスマスが過ぎ、正月を向かえ、

冬休みが終わっても続けられていた。

聖は、年末年始の一週間香港にもどっていたので、初詣には受験の神様のいる

神社へ健児たちと行き、受験合格とコンテスト優勝をお願いしてきた。

聖が日本に戻り、新学期が始まった。

コンテスト本選は2月14日バレンタインデーの日だ！

しかしその前に大学試験がある…

今日も教室の中で勉強と体力作りに頑張っていたが、

放課後、久しぶりに日野がお付のメンズたちと校門で俺たちを待っていた。

しかし、女子は群っていない。

龍星高の生徒たちは俺の応援にまわっている。

「やあ、聖ちゃん！しばらく見ない間に、またかわいくなっただね。

僕のためだったらうれしいなあ」

相変わらず日野はニヤけていた。

「ふん！あなたのためじゃないわよ！ぜんぶ城のためなんだから！」

「いいぞー聖。もっと言ってやれ！」

「2月14日の優勝は城がいただくわ！」

聖の言葉に日野の顔がピクツ動いた。

「へ〜、おまえも本選に出るんだ。まあ、今日はそれを確認しにきたんだけどね。」

僕はまあ、本選出場は確実だったんだけどね。君の本選出場に僕もまたまた

張り合いがでるわけで…ははははは〜」

日野は高笑いをして聖の頬を撫でた。

聖は日野が触った頬をゴシゴシと拭き、日野菌を取り除くと、「城〜」と言って、俺に腕を絡ませピトツとくっ付いた。

俺は内心デレデレだったが、冷めた目で日野を見て言った。

「悪いな、日野。おまえにかまっている時間はないんで、失礼」

日野の引きつった顔を確認して俺と聖は背を向けて歩きだした。

「まじキモイやろーだぜ。城、本当に優勝しろよな！じゃないとオレ

あのキモ野郎と付き合わなきゃなんねんだからな」

「うん！わかった！」

俺たちは深くうなづき合い、夕日をバックに家路に着いた。

万が一、俺がコンテストで負けて、日野が聖と付き合い合うことになり、聖が男とわかったら日野はどうするのだろう…  
などという疑問は俺たちには全くなかった。

俺はただ、聖を取られたくないだけだ。

## 第十九話 悪夢二連発

大学受験が始まった。

俺は、よくぞ体力作りと受験勉強を両立して、いままで頑張ってきたと、

自分で自分を褒め、受験前日12時にベッドに入った。

緊張しているからなのか浅い眠りの中、夢を見た…

暗闇の中、俺は一人机に向かって試験を受けている。

ふと、隣を見ると日野が立っていた。

「試験も聖ちゃんも僕のモノだぁぁー、はっはっはっ」

日野が高笑いで言った。

「日野くうくん」と遠くから聖がやって来て、俺を無視して日野と二人で

立ち去ってしまった。

俺は二人を追いかけようとしたが、なぜか床にはバナナの皮が引き詰められていて、

俺は滑って転んでクルクルと奈落の底へと落ちていった。

すべる…落ちる…

「うわああああ、いやだああああ」

俺は自分の叫び声で目が覚め体を起こすと、部屋には日の光が差し込んでいた。

朝…だった。

「どうした！大丈夫か?!」 目の前で聖が驚いていた。

俺は聖の肩と腕をポンポンと叩き、聖が現物かどうか確認した。

「な、なんだよ……」

「ユ、ユメか……」俺は一人、聖を見ながらうなずいた。

「あつ、なんで聖がここにいんだよ」

「お母さんが起こして来いって。おまえ、すんげーうなされてたぞ」  
聖が心配そうに言った。

「……大丈夫、ちょっと緊張しているのかもしれない」  
受験当日にしては最悪な夢だ。

俺はいやな汗をシャワーで流し、朝食を食べ、両親と聖の見送りを  
うけ

試験会場に行った。

変な夢のせいで気分爽快とは言えないが、体調は最高によかった。

自分の受験番号の張られている席に座り、参考書を開き最後のチエ  
ックをしていた。

ドサツと、俺の横に誰かの鞆が落ちた。

「えっ？」

見上げた先にいたのは日野……だった。

「ひ、日野おお？」まさか、正夢というやつか。

日野の顔は引きつり、あわてていた。

「……」何も言わず通路を挟んで隣の席に着いた。

休憩に入っても俺と日野は一言も口を聞かず試験を終えた。

家のリビングのドアを開けるとソファに座っていた聖が飛んできた。

「試験、どうだった？うまくいったか？」

「・・・」

「ど、どうしたんだよ、城。ダメだったのか？」 聖が俺の顔を覗きこんだ。

「あいつがいた・・・」 俺は不機嫌に言った。

「あいつって、誰だよ」

「日野・・・」

「げげーっ！まじかよ！同じとこ受けてんのかよ」

「それに席、隣同士だった！あんなに大勢の受験生がいるのに通路挟んで

隣だぜ、となり・・・」

「どこまでもしつこい野郎だなあ、日野」

そう言うと、聖はソファにダイビングをした。

「とりあえず、残すところコンテストだけだな！」

「はい、頑張ります」

俺はコンテスト一週間前から最終準備に入った。

元モデルのおふくろにメンズ用ウォーキングを指導してもらい、当日着る服を一家総出で見立てに行き、

「少し、日焼けした方がカッコイイと思う」というクラスの女子たちの

アドバイスを取り入れ、コンテスト2日前に日焼けサロンに行った。相川が通っているサロンに連れて行ってもらったが、なぜか健児と石田もついて来て、一緒に色黒になった。少し小麦色になったもやしの石田は、また何か新しい発見をしたように鏡に写る自分の姿を見なが一人うなずいていた。

コンテスト前日、この夜は受験前日と違って熟睡できるかと思っていたが  
また眠りが浅かった。

そして、また夢を見た。

教会の大きな鐘がカランカランと鳴っている。

神父さまを前に俺は一人立っていて、  
遙か後ろにある扉が開き、父親と一緒に聖が俺に向かってバージンロードを  
歩いてきた。

途中で俺が聖を迎えに行き、聖の父親から聖を託され、二人で神父  
さまの前に立ち

誓いの言葉を述べた。

そして誓いのキスになり、俺は聖の白いレースのベールを上げた。

あ、げ、たああああ

「よっ！」

「ひ、日野おおお？！」

花嫁が日野になっている。



そしてヤツは言った。

「実は僕、聖ちゃんが狙いじゃなくて、城！おまえのことが好きだったんだあ！」

日野はそう言くと俺の両腕を掴んだ。

「や、やめ、ろおお」 俺は必死に日野から離れようとしたが

日野がタコのような口をして迫ってきた。

「チュウウウウ」

「うわぁー！ー！やめろー！ー！」

俺はまた自分の声で目が覚め飛び起きた。

「ハアハアハア……」

汗びっしょりだった。

「大丈夫か？！またうなされてたぞ！」  
聖がいた。

「うっ、うわぁくん、サイテーだ！サイテーのユメをみたあ」  
俺は聖に抱きつき泣いた。

「おい、何泣いてんだよ。目腫れっぞ。どんな夢みたんだよ」  
聖に聞かれたが、言葉にするのもおぞましい……

「だ、大丈夫だ。なんでもない」

忘れよう……あんな夢はとっと忘れよう。

## 第二十話 イケイケメンメン・コンテスト 1

午前中にコンテスト会場に集合だったので、俺と聖は先に家を出て、おやじとおふくろは開場に合わせて来る事になった。

会場に着き、控え室に行くと出場者の半数近くがすでに来ていた。

「うっ、みんなカツコイイ……」

俺は打倒日野！だけでこの日を迎えたので全国レベルを知らなかった。

全国各地から選ばれたメンズたちのレベルは非常に高い。というか、みんな線が細くて色白でモデルみたいだ。

俺……体力作り……一生懸命しちゃった……よ。日焼けも……

「聖、俺ヤバイかも……」俺は気落ち寸前だ。

「だ、大丈夫……だよ。城、おまえが一番カツコイイ……よ」

聖の声は少し淀んでいた。

おまえも不安なのか、聖。

「やあ、聖ちゃん！今日もかわいいねえ。僕の応援に来てくれたのかい？」

控え室の奥から日野の声がした。

すでに来ていたのか、おまえは。

いつも目立っている日野がメンズたちの中に入るとイケメンオーラが薄くなっていた。

おまえがそんなだったら、俺のオーラはどーなるんだ！

日野の声でメンズたちがこつちを見てざわついた。  
俺じゃなくて聖を見ていた。

かわいいだろー、ちよっと自慢だ！

日野が近づいてきたが俺は今朝見た夢を思い出し、吐き気がして日野と目を

合わせられなかった。

そんな俺に日野が言った。

「城くん〜かわいいそうだが、聖ちゃんの横に引っ付いていられるのも今日、

いや、夕方までだな！ぶっはっはっはっはっは」

いつものいやな高笑いが響き渡った。

俺たちは日野を無視して部屋の外に出た。

「おーい、無視するなよお、お〜い」

後ろから聞こえる日野の声は少し淋しそうだった。

「城、あせらず、緊張せず全身で頑張れよ！とにかく自立て！オレちゃんと

見てるからな！」

「うんうん！頑張る！」

聖と熱い抱擁をかわし、聖は付き添い控え室に行ってしまった。

俺が出場者控え室に戻ると日野がすぐさま飛んできた。

「城…」

「な、なんだよ。しつこいなあ」

「お、おまえがいて少し安心…」

いつもの日野じゃない発言にびっくりした。コイツも不安なんだろう。

地元ではNo.1を誇るいい男であっても全国区になると自信をな

くすよな…

日野の気持ちはよくわかるよ…

「さっきの女の子、君の彼女？」 近くにいたメンズ君が聞いてきた。

「はい！そうです」 俺は間髪入れずに返事をする。

「今日までは…」 と俺の横にいた日野が早口な小声で言った。不安がっているわりには、そこらへんは譲れないらしい。

「かわいい子だよ、いいなあ」

「ボクも彼女みたいな彼女ほしいな」  
周りのメンズたちが口々に言った。

「えっ？みなさん、こんなにカッコイイのに彼女とかいないんですか？」

俺は素直に質問してみた。

「だって、ボクらレベルに似合う女の子って少ないよね」

「やっぱ、連れて歩くんだったらそこそこいい女じゃないと…」

あっ、そういうことですか…

その後、主催者側スタッフからコンテストの流れを説明され、通しリハをやった。

コンテストの流れは、最初、舞台に25名が全員並び、自己紹介をする。

一度袖に引っ込み、一人ずつ特技を披露。

その後、10名にしばらく、審査員からの質問に答え、グランプリ1名と

準グランプリ1名が発表される。

俺たちはリハを終え、再び控え室に戻り着替えた。

日野はN o . 5の札を、俺はN o . 21の札を胸に付けた。

出場者は全員で25名だ

## 第二十一話 イケイケメンメン・コンテスト 2

俺たち出場者はスタンバイのため舞台袖についた。

袖から会場の様子を覗いてみたら、両親と聖、サエドンと3Bのみんなが

来てくれていた。

みんなあ、忙しいのにありがとう…

俺は心の中で涙した。

コンテストが始まり、一番から順に名前を呼ばれ、マイクの前に行き出身地と名前と年齢を言わなければならない。

五番の日野が名前を呼ばれ出て行ったが、緊張しているのか右手右足、左手左足が一緒になっていた。

ひ、日野…。かわいそうに…。

俺の番になり、マイクの前に立った。

ライトはステージ上にしか当たっていなかったが、薄暗い客席の中の聖たちの姿は思いのほかよく見えた。

健児たちが作ってくれたのが大きな垂れ幕が異常に目立っていた。

俺が自己紹介を始めると3Bから合いの手が入った。

「城〜」

「がんばれ〜」

「いよっ、大岡あ」 とかはよかったんだけど…

「よっ、中村やー」 歌舞伎じゃないし…

「たまや〜」 花火でもないし…

叫んでいたのはサエドンだ。

石田に注意されているのが見えた。

審査員は苦笑いで後ろを振り向き、会場は爆笑だったが、俺よりサエドンのの方が目立ってどうすんだよ…俺は首を捻りつつ 自分の位置に戻った。でも緊張がほぐれた。

一度控え室に戻り、特技披露の順番を待った。

控え室に残っているメンズたちでモニターに映し出されている会場の模様を見ていた。

歌を歌ったり、ギター演奏したり、モノマネで笑いをとっているやつなど

みんなさまざまな特技を披露しアピールしていた。

俺の特技と似ているメンズは誰もいなかった。

みんな結構、優雅だったり繊細な格好良さをアピールしていた。

俺はワイルド過ぎたか…少し心配になってきたが、今更しようがない。

たて笛持ってきてないし…

日野はダンスを披露した。

ダンス：「ロック」「ポップ」「ハウス」…「ブレイキング」…などではなく、

一人社交ダンス…だった。

ちゃんと燕尾服を着て、ステージの端から端までを目一杯使って一人で器用に踊った。

日野が控え室に戻ってきて俺のところに来て言った。

「どうだ！僕のダンス！」 自信満々だ。

「うん：なかなかよかったよ」 俺は一応褒めておいた。  
控え室が、大爆笑だったことは言わなかった。

「だよなあ〜僕のダンス光ってただろう？ふあっふあっふあっ」  
と日野は爺さんのような笑い方で去っていった。

「21番から25番までの方、スタンバイお願いします」  
スタッフの人に呼ばれた。

俺は舞台に向かった。

「21番！大岡城。功夫の型とヌンチャクをやります！！」  
俺はステージ中央に立ち、おもむろにTシャツを脱いだ。  
俺の顔と鍛えられた体のイメージが違うからだろうか、きゃ〜、き  
や〜と

言う女子の声が聞こえた。

俺は汗と涙の染み込んだヌンチャクを握り締めたまま、最初にボデ  
イビル部の相川の

リクエストでボディービルダーのポーズをまねした。

胸筋はまったく動かなかった…が、うけた。

本人はいたってまじめにやったのだが、なぜか笑いを取った。

…：… おかしいなあ？

俺は首をかしげつつ、次に功夫の型を披露した。

「いよっ！カンフースター」

「鶴仙人！」 などと合いの手をいれてくるのはサエドンだ。



や、やりずれ〜

最後に又ンチャクだ。

毎晩毎晩、聖に指導を受けて頑張ってきた又ンチャク。

俺は頑張ってきた自分を回想しながらも最後に又ンチャクを脇に挟み

「あちよおおおおお」 奇声を発した。

なりきるということは恐いものだ。

俺の気分はすでに香港の功夫スターになっていた。

ばっちり決まった俺は、会場から割れんばかりの拍手をいただき、

一礼をして控え室に戻った。

## 第二十二話 イケイケメンメン・コンテスト 3

控え室に行くと、

「君、すごい肉体なんだね」

「ちよつと触らしてくれ！」 などと数人のメンズたちが俺の胸や

腕やらを

ベタベタ触りはじめた。

聖に触られるのは大丈夫なのに、他の男から触られるのはなんかキモイ。

一人の色白なかわいらしいメンズから

「君はもちろん、攻めだよ。ステキな体だよ」

と、ニコつと微笑まれ言われた。

なんのことやら分からない。

俺が「攻め」の意味を知るのは、ずっと後のことだ。

全員の特技が終わり、少しの休憩の後ステージに上がり、最終候補10名が発表された。

「5番！日野万太郎さん！」 日野の名前が呼ばれた。

ちなみに日野の名前は万太郎と言う。

日野は「あたりまえだ」とでも言いたげな目で俺を見てから一步前に出た。

「21番！大岡城さん！」

9番目に俺の名前が呼ばれた。

3Bの連中は大喜びだった。

俺は日野の方をチラッと見て、ニッコリ微笑んであげた。  
日野は下唇を噛んで俺を睨んだ。

俺は、とりあえず最後まで残れたことにホッとしていた。

選ばれた10人を残し、他のメンズたちは舞台を下りた。  
これから審査員からの質問を受ける。

「やっぱり、大岡君も10人に残ったんだね」  
俺に話しかけてきたのは、さっき俺の体をいつまでもペタペタと触つて

「攻め」発言をした12番の登戸祐二君だった。

色が白く、165cmくらいの秋田から来た高校一年生のかわいい子だ。

男の俺でさえ、かわいいと思えてしまう…

…いやいや、俺には聖がいるだろうと、自分に言った。

「まぐれだよ、きつと。みんなカツコイイし、君みたいにかわいかったり

するのに、俺選ばれていいのかなあ、なんて思ってる」

俺は頭をかきながら登戸君に言った。

「そんなことないよ！大岡君はカツコイイです！ヌンチャクもできるし、

僕、あこがれちゃいます！…っ言つか好き…」

「え？」 最後の方は小さい声だったから聞こえなかったが、登戸君は

そう言っつて、俺の上腕二等筋を触りながら褒めてくれた。

登戸君のスキンシップの意味があまりわからないまま、審査員からの質問が始まった。

審査員の方が俺に質問をした。

「尊敬する人はどなたですか？」

無難な質問だ！

「ブ、ブルース・リーさんです！」

俺は披露したヌンチャクと結びつくように答えた。

「理由は？」

「彼の功夫に対する愛と強い精神が……」

実のところ、彼の映画は聖に無理矢理見せられていたが、彼自身を語るほどの

知識は持ち合わせていない。

が、目を輝かせて彼の話をする聖の話を思い出しながら、まるごと言った。

言い終えて俺が聖を見ると、親指を立てて喜んでた。

「みなさんたぶん、おモテになると思いますが、理想の女性のタイプは？」

げっ、理想のタイプ？

俺は一生懸命考えた。

聖を思い浮かべたが、アイツは男の中の男だ…

聖と出会う前の俺の理想女性は…？

……だ、ダメだ、わからない。

「大岡さんのタイプは？」

俺の番になってしまった。

「えーっと、自分より強い人…」  
ち、ちがーう。

M的な発言をしてしまった。

「じゃ、女子プロレスラーの人とかかしら？」 審査員の女性に聞かれた。

「は、はい。あつ、いえ、心の強い人という意味です」

あせったぜ。俺、強い女が好きだったのかよ…  
自分でも気がつかなかったが俺はMの様だ…

10名の最終審査が終わり、一度審査員が席を離れ、俺たちも舞台の袖に待機した。

また登戸君が俺の傍に来て

「大岡君は強い人が好きなんだ…午前中に控え室に来た大岡君の彼女も強いのか？」  
少し悲しそうな顔で聞かれた。

「えっ？ああ？あれテキストに答えただけ。タイプの女性って考えた事なかったし、

別に女の子だけが対象じゃないし」

やべっ、俺なに言ってたんだ。聖のこと考えてたら、とんでもないことを

口走ってしまったぞ！

俺は「そっちの人」だと思われてドン引きされたらどうしよう〜と、内心あせったが、

なぜか登戸君の顔は明るくなり、目がキラキラになった。

ど、どうしたんだ?!登戸君?!



## 第二十三話 イケイケメンメン・コンテスト 4

「スタンバイお願いします」 スタッフの人の声でした。  
審査会議が終わったらしい。

俺たち10人はステージに並んだ。

日野は、まだライトの当たらない暗いステージで俺の方に顔を向けて親指を立て自分に向けて動かしていた。

たぶん「グランプリは僕がいただいた」と言いたいのだろう。

ステージにライトが交差し始めた。

まずは「準グランプリ」の発表だ。

「第5回イケイケメンメン・イケメンコンテスト！準グランプリは

――

「NO.3 池田綿雄さんです」

俺でも日野でもなかった。

「さあ、グランプリの発表です！」

司会者が言うと、またステージが暗くなりライトが交差した。

「第5回イケイケメンメン・イケメンコンテスト！グランプリは！  
！」

テケテケテケとドラムの音がし、司会者が口を開いた。

「NO.18！登戸祐二さんー！」

登戸君だった。

やっぱり、かわいいし年上の女性にもかわいがられるタイプだよな

メンズたちが登戸君におめでとを言い、握手をしていたので俺も、

「登戸君！おめでと〜」 と言ったら俺の差し出した手を無視して抱擁してきた。

えっ、俺はただ握手を…

登戸君が前に出てトロフィーとかいろいろと貰っている時、日野を見た。

落ち込んでいる…

とりあえず、これでこの戦いは終わった。

日野もグランプリを取れなかったことに俺はホッしていた。

いきなり司会者の声がマイクを通して会場に響いた。

「ここで、今回は特別賞がございます」

司会者の言葉に会場が少しざわついた。

元々特別賞なんてない。

司会者が続けた。

「審査員の方々から、グランプリは惜しくも逃しましたが、どうしても〜しても賞を

差し上げたいメンズの方がいるということで、今回は審査員特別賞を急遽設ける事になり

ました」

そして発表された。



「では、発表いたします。第5回イケイケメンメン・イケメンコンテスト

特別審査員賞は……NO.21！大岡城さんです！」

えっ、お、俺…?!

会場の3Bのみんなの万歳が聞こえた。

登戸君は俺に「きゃ〜おめでと〜」と言ってまた抱きついてきた。  
……きゃ〜って…?きゃ〜ってなに?登戸くん?

審査員長がコメントを言った。

「大岡さんは、いままでにないタイプでした。鍛えられた肉体美！  
そして

カンフーを愛する熱い心！審査員一同、胸を打たれました」

聖のカンフーの思いの受売りで俺は特別賞を貰ってしまった。  
特別賞のトロフィーと副賞は後日自宅に届けられることになった。

控え室に戻ると日野が来て言った。

「勝負はまだ終わっていない！」

「えっ?なんだよ!俺、賞貰ったじゃないか」

日野は人差し指を俺の目の前で左右にチツチツと振って

「城君はグランプリでは、なーーい!この戦いは次に持ち越す!  
ぶっははははは〜」

「ずるいぞー!日野!おい…おい」

日野は俺の話も聞かず、控え室から立ち去った。

さげんなよ。

俺が日野の後姿を見送りながらブツクサ言っている

「大岡君〜連絡先交換してくれるかなあ」 登戸君が言ってきた。  
俺は登戸君とメアド交換をした。

「僕、これから関係者の人達と会わなきゃならなんだ。だから今日はこれで

お別れだけど、必ず連絡するから待っててね！」

「お、おう…」

「あつ、大岡君ってさあ…」 登戸君が顔を赤らめながら聞いてきた。

「ん？なに？」

「うん…大岡君で、ノンケ…なの？」

えっ？あつ、ん〜、のん気なタイプではないよなあ俺。

「別に…違つよ」

俺が答えると登戸君はまた目をキラキラさせ、今度は瞳の中に星を散りばめ

「ほ、ほんと?!わあ〜い」

と、うれしそうな登戸君は、待っているスタッフの人のもとに行き、「ばいばーい、大岡君！絶対メールするからね！」 と言い去っていった。

なぜ、登戸君はそんなに「のん気」にこだわるのだろう…  
俺が「ノンケ」の意味を知るのもう少し先のことになる。

メンズのみんなもバラバラと控え室を後にした。

俺は廊下で待っていた聖に、さっきの日野の発言を話した。

「あいつもしつこいよな。でもまあ、当分は大丈夫だろうけど」

「もし、またなんか言ってきたら、俺戦うから。聖のために戦うから！」

そう俺は聖に宣言した。

その後、日野からの挑戦状を何度も受け取ることになるのは、この時まったく考えていなかった。

そして、春には登戸君が秋田から上京して来て…

うっ、思い出しただけでも…

俺は聖と会場の外で待っていてくれた3Bのみんなとサエドンと両親と合流した。

みんなから「おめでとう！」を言われ、また万歳をしてくれた。

みんな！ありがとう！

みんなが協力してくれたおかげだ！！

## 第二十四話 聖の両親

大学も受かり、コンテストも終わった。

高校生活も残すところ、数日間の登校と卒業式のみとなった。

卒業式まで登校する日も少なかったが、3Bの仲間とつるんで遊びに行ったり

していた。

健児は俺と同じ私立大学に、あつ、日野もだ…

相川は体育大学へ

石田は国立大学へ

聖は「オレはファッションデザイナーになるぜ！」と言いつつ服飾専門学校へ

行くことになった。

3Bのみんなも進学や就職がそれぞれ決まっていた。

卒業式2日前、卒業式に参列するため聖の父親が日本に帰国した。

「今、成田なんだけどマンションに着いたら、父さんが城の家に挨拶に

行きたいって言うてんだけど、いいか？」

聖から連絡が来た。

おやじとおふくろは、いそいそと部屋を片付け始め、俺は一応ジャージから

それなりの服に着替えた。

初めて会うからなあ、聖のお父さんと…

俺は受験よりコンテストより緊張していた。

聖のお父さんだったら、きっとダンディなんだろうなあ〜  
などと俺はまた勝手に想像していた。

4時過ぎにチャイムが鳴った。

俺の心臓も鳴り始めた。

き、来ちゃったよ。ううううドキドキだぜ。

おふくろが玄関に出向き、リビングに聖たちが入ってきた。

聖の横にはずんぐりむっくりした男性と、ものすごく美人な女性が  
立っていた。

不釣合いな二人だったが

「おう、城。オレの父さんと母さんだ」 聖が言った。

えっ…お、おとう…さん！ええー、お母さん？

聖のお母さんは亡くなっているはず…

あっ、継母か…

「じよ、城です」

俺は一応、聖の両親に挨拶をした。

「いつも聖がお世話になっているようで、ありがとう、城くん」

その継母はやさしい口調で言った。

「いや〜、熊山から聞いて、城くんが傍にいてくれて本当に感謝し  
てます」

お父さんは深々と俺に頭を下げた。

ちなみに熊山とは理事長のことだ。

「いえいえ…」 などと俺も頭を下げた。

しかし、このおやじからよく聖みたいなきれいな子供ができ

たよなあ。

あつ、お母さん似か…聖は。でもこの女性は継母だよな？  
つーことは、亡くなったお母さんもそうとうな美人だった  
のか…

このおやじ、見かけによらずモテまくり体質？

もしかして、金で囲ってるとか？

いやいや、それはないよな…

などと、俺は想像を張り巡らせていた。

「もう、この子ったら小さい時から暴れん坊で、お腹の中にいた時  
なんて

ボンボン蹴って、早く出せーみたいな。ほほほほ」

聖の継母の話で、おふくろたちは盛り上がっていた。

そうなんだ、腹の中にいたときから暴れてたんだあ、聖…

腹の中…？継母なのに腹の中？

俺はわからなくなり、昨日買った雑誌の話を口実に聖を自分の部屋  
に連れて行った。

「聖のお母さん…」

「ん？オレの母さんがどうした？結構美人だろ？城のお母さんも綺  
麗だけどな。

オレ、まじ母さんに似てよかった、父さん似だったら城も困るだ  
ろ？」

聖はそう言い笑ったが、

「ま、継母じゃないの?!」俺は聞いた。

「…へっ？」聖の顔がハニワのようになった。

「なに？なんの話？オレの母さん、あの人だけだけど…？」

「転校してきた日、言ったじゃないか。お母さんいないって。で、お父さんは

香港の女の所だって…」

俺の言葉に聖が笑い出した。

「おいおい、オレの母さん勝手に殺すなよなあ。母さんは家にいない。

それに香港の女の所って母さんの所って意味だし」「  
そういつて聖はまた笑い出した。

俺は勝手に聖の生い立ちを創作していたのか…

この後知った事實は、聖のお父さんが「崎田権次郎」。

「GONJILLO」という世界的有名な日本人ピアニストだった。俺でも知っている名前だ。

ピアニストにしては少し短めの指だが、女性が弾いているのではないだろうか

思わせる綺麗なやさしい音色を奏でることでも有名だった。

しかし、聖がお母さん似でよかった…

みんなで食事をしながら、俺はそればかり考えていた。

## 第二十五話　そして高校卒業（完）

卒業式当日、聖にとっては女生徒としての最後の日だ。

俺たちは、いままで通り、手を繋いで登校した。

今日が最後か…こうやって聖と手をつなぐのも…

俺は少し黄昏ていた。

そんな俺の気配を察したのか聖が言った。

「これからデートするときは、オレまた女になってやるから

こうやって一緒に歩こうな！」

「うん…」

やっぱり男同士で手を繋いで歩くのは世間の目があるよな…

かといって、聖は女装の趣味はないから卒業してからも女にさせるのは

かわいそうかなあ。

そんなことを考えているうちに学校に着いた。

最後のHRでサエドンはすでに泣いていて、女子も男子も目が潤んでいた。

式の最後に3Bはみんな大泣きし、校庭に出てサエドンを胴上げをする、

下級生や他のクラスの生徒から少し羨ましがられた。

それだけ俺たち3Bは一つになっていたと言っただけだ。



卒業式を終え、「俺の彼女」は「俺の彼氏」になり、「俺」と「彼女」の10ヶ月はこうして幕を閉じた。

完

ちなみに、卒業してからも3Bはサエドンを含め定期的に会って  
て、

聖が男だとみんなにバレたのは卒業して間もなくのことだった…

そして…俺は4月から楽しい大学生活が始まる…予定…だった。

…日野が…

登戸くんが…

だ、だれか、誰か助けてくれ~~~~~！

第二十五話　そして高校卒業（完）（後書き）

一応、高校編はこれでおしまいです。

読んでくださり、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0493h/>

---

俺と彼女の10ヶ月

2010年10月9日12時39分発行